KENZO HIOKA
日岡兼三

目次

ごあいさつ

夫・日岡兼三について

虚空を凝視する眼 ～画家としての日岡兼三の再評価に向けて～

友人・日岡兼三について

先生・日岡兼三について

展覧会を開催するにあたって

各シリーズについての解説

資料（日岡兼三と会場風景）

現在保管されている作品（図説・リスト）

日岡兼三年譜

協力へのお礼

このカタログの売り上げは、すべて今後の日岡兼三作品の

額装および保管に関する資金として活用されます。

ごあいさつ

日岡　美穂

このたび、日岡兼三展を開催できることとなりました。

日岡兼三は、昭和２１年に満州で生まれ、御縁のお蔭で人生のほとんどをこの宮崎という地で過ごし、作品の制作に勤しみました。多くの方々との出会い・交流があり、そのなかで作品は作られていきました。日岡兼三は、常に新たな試みを楽しみながら制作し発表を続けてきました。絵画教室では、素晴らしい生徒さんにも恵まれ、掛け替えのない時間を過ごすことができたようです。日岡兼三がこのように造形活動に携わり、生き抜くことができたのも、皆様の深いご厚情の支えあってのことと感謝に堪えません。

今回の展覧会をきっかけに、現在手元にある作品や資料をこの図録カタログにまとめることとなったことをとても嬉しく思います。今回の展覧会と図録カタログをとおして、日岡兼三の様々な造形活動を振り返るとともに、もしありましたならば新たな一面を見ていただく機会にもなればと願っております。そして、これからも日岡兼三の作品が愛され、語り継がれれば幸いに思います。

夫・日岡兼三について

日岡　美穂

今回カタログを作成するにあたり、兼三のことを妻の目線から書いてほしいとのお話がありました。私の知る兼三のいろんな一面を、少しここに書き記したいと思います。

日岡兼三には、５人の兄弟がいました。兼三は三男で、長男、長女、戦時中に小さくして亡くなった次男、そして、双子の弟達です。兼三の父方の両親が宮崎に移住していたことから、戦後宮崎に住みはじめました。父親が病に倒れたこともあり、兼三は高校に行きながら、また卒業してからも、一家の経済を支えていたそうです。そのような状況もあり、絵に取り組み始めたのは、弟さんたちが大学を卒業してからだと思われます。

絵を描くことや色々な物を創ることは幼いころから好きだったようです。卒業後に惣菜屋をしていたころ友人が絵を描いているのを見て、本格的に描こうと思ったようでした。

末原晴人氏を師事しデッサンを数年かけて学びました。末原氏の所属する光風会にお世話になった時期もありました。結果的に脱退しましたが、末原氏のことはいつまでも師と仰ぎ、大切に思っていたように感じました。また、末原氏も兼三が個展を開くと必ず見にきてくださっていたようです。またこの時期に友人とも出会い個展を共にいたし高め合い、また様々な面で支えていただいた交流は亡くなる時まで続きました。

そのような中、大阪で教職についていた弟の一人が病気で若くして亡くなりました。それは兼三が３３歳のことでした。それまでの絵は、師事していた末原先生の絵や、傾倒していたエゴンシーレなどの影響をうかがうことができますが、弟さんの死後、兼三の絵は抽象的な表現が強くなっていきました。マーブリングや紙を焼く偶然の行為を取り入れ、コラージュを行いモノトーンの画面に強烈な赤を配する厳しい構図の作品を制作しました。当時の兼三の辛い心境を表しているようでした。弟の死によって、兼三独自の表現がさらに精鋭化し、そして独自の雰囲気を確立していったように私は感じています。

このころ、東京のギャラリーの関係者から「東京に来ないか。」と声をかけられたことがあったようです。彼は家が大変な時期だったので行きませんでした。この

ことは、本人から聞きました。きっと行きたかったのでしょう。しかし、東京へ行っていたら自由に表現活動ができたかは分かりません。それは、とても大事なことで、兼三もそのことは気づいていたみたいです。

兼三は、３６歳から家の都合で絵画教室を開き表現活動を個展発表にて続けました。絵画制作を中心に生活をしたかったこともありましたが、収入は少なく大変だったようです。それを、友人や知り合いは兼三を様々な面で助け支えていただいたようでした。

そのような時に、私と兼三は出会うことになりました。あるとき、私の母が友人に誘われ住吉の公民館に絵を習いに行きました。そこの講師が日岡兼三でした。直ぐに一冊の兼三の画集を借りてきて私に見せました。ちょうどそのころ、後輩が私に「日岡兼三さんという画家がいるけれど、会われませんか。」と言ったのです。同時だったのは皆びっくりしました。出会ってからは、二人ともある程度の年齢になっていましたので、数か月で結婚ということになりました。不思議な縁だと思います。

兼三は、明るく裏表がなく真面目な性格でした。また、多くの友人に恵まれました。しかし、頑固な面があり思い込んだら、なかなかそれを変えることはできないこともありました。

向上心が高く努力をし、新たな表現を求めて制作活動しました。美術表現については周りの人やTVなどからもあらゆる情報を取り入れようとしましたし、美術関係の本も沢山買い求めていました。材料についても、カメラ・パソコンを始め利用できるものは試していきました。自分にとって材料がどうなのかも絶えず問うていたように思います。油彩から始めましたが、自分の手に合うのは水彩ではないかと考えアクリルへと変更し、さらに墨へと手を伸ばしていきました。様々な方の個展会場も丁寧に作品を見て、良い所を見つけ学ぶようにしていました。作品を見るということの大切さを、私は教えてもらったように思います。

表現の内容も深めていきましたが、それに合わせ表現の形も変わっていきました。絵画表現から始まり、陶芸も始めたことをオブジェ制作につなげていきました。造形表現に偶然を取り入れる姿勢は一貫して変わりませんでしたが、製作を進める展開する中で徐々にインスタレーション的な方向へと進んでいきました。

病気療養の３年間で、所属していたフラクタスにてインスタレーションの青のシリーズ「時」を制作し、発表しながら完成しました。これは、多くの友人や生徒さんの制作参加で作られたものです。たくさんの人の手が加えられることで作品は完成度を増すと語っていました。病気で体を動かすのも大変になった中においても、造形表現の広がりを考え続けていました。

文学や音楽も好きでした。それらも、絵画表現の内容を深めるための一つでもあったと思います。寝る前は、必ず本を読んでいました。亡くなる前は、俳句をつくるグループに入っていました。最後に句集をその方々に作っていただいています。癌は目に転移していきましたが、斎藤史の歌集を常に側に置いていました。そして、分厚い歌集をそらんじていました。その本は、棺にも入れて天国に持っていきました。

平成１３年のお正月に空港展をおこなったころ体調が悪くなり、医者から肺がんと宣告されました。同年７月には手術を受けないことを決め、作品の発表と絵画教室は継続されました。生徒さんのご厚意と助けでギリギリのところまで絵画教室は開くことができました。平成１５年の春には左目に転移し、目はどんどん見えなくなっていきました。眼鏡を合わせて作っていただいてもデッサンの線を真っ直ぐに引くことができないことを自分で悟った時に、絵画教室を閉じる決心をしました。最後の教室の時に、生徒さん一人一人に、感謝の気持ちを告げて閉じました。それは亡くなる数か月前でした。

それからさらに病状は悪化していきましたが、絵筆を持って制作しているときは病気や痛みを忘れることができたようです。ベッドの側に絵具などの材料を置いておきました。彼は用があって起きたときに、絵筆をもって描いては用をすませ、そしてベッドに休みました。彼は完全に失明することなく亡くなる２日前まで制作を続けることができました。完全に失明した時に彼はどのようになるだろうかと心配しました。今思うと、それでも彼は絵を描いたと思います。

兼三にとって美術は、心より大切で好きなことだったように思います。社会との関わりの彼の一番大切なところに位置していたと思います。不器用な兼三は時折衝突も起こし周りの方々にご迷惑もかけましたが、多くの皆様のお蔭で自分の道を思い残すことなく駆け抜けることができました。そんな兼三の美術と向き合う姿は、私にとって誇りでもあります。お世話になった皆々様、誠にありがとうございました。

日岡美穂（ひおか・みほ）

１９５３年宮崎県生まれ。１９８６年に日岡兼三と結婚。中学校美術教諭として働きながら、兼三の制作活動をサポートした。自身も制作活動を続け、兼三の一番の理解者として最期まで見守った。没後も兼三の作品の保管に尽力し続けている。

虚空を凝視する眼

～画家としての日岡兼三の再評価に向けて～

石川　千佳子

始めに言っておかなければならない。日岡兼三は優れた画家である。

意表を突く独自の手法をあみ出し、ジャンルを軽々と横断して宮崎のアートシーンを活気づける日岡に、かつてトリックスターという称号を進呈した。

しかし現時点から顧みる彼は、骨の髄まで絵描きであり、早すぎた死を超えて、何代生まれ変わろうとも絵を描いてやると言わんばかりの気迫に溢れている。

死骸、骸骨、卵殻、種子

アトリエに鳥の死骸があった。無造作に置かれた頭蓋骨には、手垢がついていた。卵の白い殻もあったと思う。どれも乾いた抜け殻である。

宮崎市内の喫茶店ウィングで開かれた1999年の個展「記憶」では、それらのモチーフを黒の微細な点で描くシュルレアリスティックな小品を発表していた。目を酷使するこの手法ではもう描いていない、と会場で聞いた覚えがある。

死骸などの写実画を、静物画やメメント・モリ(死を想え)という言葉で説明するのは容易い。ヨーロッパにおける静物画は、nature morte(仏)であれstill life(英)であれ、生命を失った死せる自然を意味し、狩の獲物である鳥や小動物の死骸を描く動物画というジャンルさえ存在する。

だが、日岡の描く鳥の死骸や骨は、ルネッサンス以降のヨーロッパ絵画のような、透視図法的空間に位置する対象物の再現的描写と等価ではない。むしろ、観察するための距離を捨象し、掌の上に物を載せて眼を近づけ、触れるように視線を這わせて獲得した画像にみえる。その克明な写実は、北方ルネッサンスの素描や版画よりも、円山応挙の写生画や岸田劉生の油彩画に近いものがあった。

さらに、微細な点の粗密から成る表現は原子の遊動を連想させるところがあり、死骸を描きながら、あたかも生の実相に迫ろうとしているかのようである。

日岡が好んで描いた死骸や、骸骨、卵殻、ひいては種子も、硬い外皮としての殻のなかに空漠とした闇を抱えている。画家の眼差しは、抜け殻が象徴する死を通して、濃密な点が織りなす闇、すなわち未生の生命を湛えて遊動する原子の豊饒にも届いていた。

紙箱の底に開く闇

1998年から99年にかけての宮日会館パピルスギャラリー(宮崎市)と南風人館(霧島市)では、「空間から時間へ」シリーズが矢継ぎばやに発表される。

すでに1996年の個展「時の凝固・堆積する時間」から、ボルトやナット等の金具を並べたところに墨を流して洗い出すという手の込んだ下地作りが行われていたが、「空間から時間へ」シリーズの下地は微細なナットの痕跡のみで埋め尽くされ、画面中央に菓子箱の底から着想したという卍形の形象が現れる。その卍形が少しずつ変化する同型のユニットで、ギャラリーの壁面全体が隙間なく覆われた。

近づいてみれば、微細なナット型の無数の集合が無限増殖を連想させ、離れれば、ゆるやかに変形していく卍形が時間の流れをアナログ的に視覚化する。

現代美術家の宮島達男は、0から9までの数字を繰り返し表示するLEDを床に散りばめて、無限に流れる時間をデジタル化してみせたが、日岡は紙と墨を用いた職人的な手仕事によって、人間の生を超えて流れる宇宙的な時間のリアリティに肉迫しようとする。

それにしても、まぎれもなくナットであり菓子箱の底なのだ。いかに抽象的にみえようとも、徹底して即物的な写実こそが日岡の全作品を支える基盤だった。ナットと菓子箱の底の出合いから覗く永遠。そこには俳人でもあった画家一流の諧謔が漂う。

幽けき蟲

蟲のシリーズは画業の到達点といっても過言ではないだろう。残念ながら、このシリーズ観ることができたのは、没後の2006年に南風人館で開かれた「故日岡兼三展　蟲を描く」においてだった。なかでも「蟲－１」と「蜻蛉」が秀逸である。

蟲－１では、金具の痕跡が浮かび上がる下地に、大きな羽のある虫が描かれている。胴体らしき部分に淡彩が施されているものの、全体は柔らかなハーフトーンの墨色と半透明の白から成る、寂びた世界である。虫の異様に太い脚は大腿骨を思わせ、顔は明らかに髑髏である。

虫も外側に殻を持つ生き物だが、その克明な素描の集積の上に、親しいモチーフである頭蓋骨や骨のイメージが重ねられることによって、日岡蟲は羽化したのだろう。

一方の青い羽を持つ蜻蛉(カゲロウ)では、工芸的な精緻さをみせる羽の線描とは対照的に、歯をむき出した表情が生々しい。カゲロウは命のはかなさの象徴であるが、触覚を下げて幽玄な薄闇に還ろうとする虫の、脚先は地面をつかみ、苦しげな横顔には生き抜こうとする強固な意志が表れる。

目の高さを合わせて、ごく近く寄り添うように設定された視点には、虫の生の在りように共感し、いとおしむ画家の深い感情が託されている。

広がりゆく青の砂漠

巨大な曼荼羅を描く美術家で詩人の玉田一陽は、インスタレーションの「『時』青のシリーズ」の青色を“HIOKA BLUE”と呼んだ。

同じく鮮烈な青色の使い手に、画家で批評家の矢野静明がいるが、矢野の青が空間に溢れ出る濡れ色だとすれば、日岡のそれはマットで、ジョットのフレスコ画を想起させる。いわば、底無しの砂漠のように全てを吸い込んで、平面的に広がっていく微粒子としての青である。

色と刻印された線描が一体化して、特権的な時間が流れる場を創造するという点では、遺作(2003年)の完成度が最も高い。しかし、即物的な写実にもとづく抽象化とジャンルの総合という観点からすれば、物理学の公式を記した青の小パネルに磁器の白い種子を載せたユニットを、床面いっぱいに並べた2002年－2の方が、より日岡らしいと言えるかもしれない。

いずれにせよ、こうしたsite specificな作品においても、壁面と床面の静止した平面が主役であることには変わりなく、むしろ絵画作品以上に古典的なコスモス、すなわち秩序ある宇宙への憧憬が感じられる。

日岡作品は年代が確定できないものも多く、素描等は特に未整理ではないかと推測される。

今回の展覧会が、特異な画塾の主宰者ではなく、画家としての再評価の端緒となり、作品の保存と調査につながることを心から願うとともに、拙稿がそのために多少なりとも資することがあれば望外の歓びである。

石川千佳子（いしかわ・ちかこ）

１９５８年宮城県生まれ。宮崎大学教授、美術批評家。兼三の生前からその活動を見続け、幾度となく展覧会評を宮崎日日新聞紙上にて発表。その作品を初期より評価し続けている。

友人・日岡兼三について

柏田　省吾

昭和４７年の夏、青木画廊主催のえびの高原でのスケッチ大会で兼三さんと出会った。えびの高原ホテルに１泊して、その周辺を油絵で描くというものだった。私は描きはじめて２～３か月くらい、兼三さんも我流で絵を描きはじめてそう月日は経っていなかったような話だった。ホテルのロビーで相撲の中継があって、たまたまそれを見ていた私と兼三さんが会話を交わした。「へんてこな奴がいるなぁ、面白いなぁ」が私の兼三さんへの印象で、きっと兼三さんも「変わったサラリーマンだ」と思ったことだろう。そうして意気投合した。当時、兼三さんは青空市場で魚屋さんをしていて、私の職場からも近かったので、お昼休憩の時間にお店に行ってよく話をした。そうしている間に、当時私が新婚で宮崎市神宮西町に住んでいたころに、兼三さんが仕事帰りにうちに寄ってはほぼ毎晩のようにご飯を食べたりするようになった。

そのうち、青木画廊主催の絵画教室に通うようになった。習い事で、趣味で、と通っている生徒さんも多かったが、私や兼三さんや、のちに３人展をする西形さんは少し違っていた。絵画教室の合評会では２０～３０人のいるなかで、私たち３人は誰の作品でもシビアなことを言っていたように思う。自分が描いた絵を良くは言われないのは、自分の人格を否定されたような気分になった方もきっといただろう。でも、仲良しグループの習い事をしているつもりはなかった。私もどんなに言われても構わない、そんな熱意があった。若かったし、ある意味では純粋だったと思う。

私たちはどうせ描くなら、ちゃんと描きたかった。その教室には３年ほど通って、兼三さんはそれから末原晴人氏と出会い、亡くなるまで末原氏を師事していた。兼三さんのしっかりとしたデッサン力は、末原氏から学んだものが大きいだろう。変な言い方だが、兼三さんは大学を出ているわけではない。けれど、美術以外の本も実によく読み、自分なりによく考え、ものの本質や表現を突き詰めていた。いろんなことをよく知っていて、本当の教養人だなと感心したものだった。

美術には、うまい・へたとはまた異なる、いい絵・わるい絵というものがあるように思う。「日本人は自分で判断ができない」という話もよくした。日本には美術名鑑がある。美術画壇・団体がある。いつまでたっても誰かに判断をゆだねて、だから自立しないのだ、と。それは絵のことだけじゃなく、世の中のことでもある。

何がよくて、何がよくないか。自分の価値判断で善悪は決められないのか、と。上手でいい絵が最高だけど、上手でわるい絵より、下手でもいい絵であることが大切だ。

描きはじめの兼三さんはうまいとは言えなかったかもしれない。それでも、最初からくだらない絵は描かなかった。いい絵とはなにか、なにが大事なことなのかが分かっていたのではないだろうか。これは美術に対してだけの話ではない。ものごとの本質をつかむことにエネルギーをかけるという人となりが、そうした作品を生んだように思う。

年齢も近く、絵を描きはじめた時期も同じで、よく、ああでもないこうでもないと話したものだった。魚屋さんで働いていたので、魚を持ってきて、うちで夕飯を食べたりお風呂に入ったりして、いつも３～４時間ほど芸術論の話ばかりをした。世界の画家たちの画集、文学や俳句、短歌の本を見ては、これはどうだという話をしていた。芸術に対する感覚が、８～９割は共通している、と私は感じていた。

そうして、兼三さんも私も、公募展などで受賞するようになっていった。美術という世界には封建的なものが否めなかった。先生や会派に認められないといい絵でも認められない。そういう状況下で、純粋に絵がいいかどうかでやっていくことが大切と考えていたことが、兼三さんと共通していた。兼三さんは人一倍努力していたし、打ち込み方が違っていた。彼の「山畑」という作品が県展で特選をとった。その作品を初めて見たときの衝撃は忘れられない。今でも、県展史上に残る傑作だと思っている。その作品が出来上がるまでに、デッサンや画面構成などに努力を積み重ねてきたのだろうが、その作品で一気に花ひらいたと感じた。その作品から兼三さんの世界観が確立され、深まっていったように思う。

兼三さんが好んで描くモチーフは、一見気持ち悪いものが多い。しかし、余計なものが削ぎ落とされ、ものの本質がそこに凝縮されて残っているその極限の有りようが好きだったのではないか。たとえば、骨。カラカラに干からびて、肉は無くなり、物質としての生き物の本質・核心が残る。それは人生を生きていくうえで何が根本において大切なことなのかを問うという価値観であり、彼独特の思考であったのであろう。

教養という点でも、彼ほど本当のものを備えた人はそう多くない。知識が多くあればいいというものではなく、本質に迫る考え方ができるか・価値観の価値尺度をどこに置くかということなのだと思う。「金持ちになりたい」と言いながら、一方で絵画教室の受講料などは最低限のものしかとらない。譲るものと譲れないものの感覚は研ぎ澄まされており、生活ができればいいと考えていたのかもしれない。ごはんを食べるためにどこかに属して頭を下げるということはなく、彼を慕うたくさんの生徒さんに恵まれ、奥さんが教師という立場で生活面も支えてくれ、好きなことができていたのではないか。

私は宮崎にいたのは５年間で、兼三さんとの「共同生活」は終わったが、その後「三人展」をやったり、父母が都城市に住んでいたため、たまに宮崎に帰ったときに会うことは続いた。いつも兼三さんは同じ方向に向かって歩いていたから、しばらく会わなくても「変わっちゃったな」なんて思ったことは一度もなかった。

よく兼三さんと話したことに「作品の静謐感」ということがある。素晴らしい作品は、静謐でシンとした美しさがある。それがアクションペインティングであったとしても、根底には静謐感が流れている。そんな話をよくした。兼三さんの蟲のシリーズやボルトを使用した作品シリーズは、そんな話を思い出させる。画面自体は一見ゴチャゴチャとして見えるかもしれない、けれど、表面の喧騒を越え、シンとした、深々としたものを伝えていくのだ。兼三さんの作品はかなり変化しているが、そういった作品の本質は亡くなるまで、一貫している。「時」シリーズでは、余計なものは無くなって、より深い静謐感に満ちている。作品たちが今もって輝きを失わず、存在感を一層強めているのは、兼三さんが真面目に芸術に取り組んできた証しなのだと私は思う。

もし今も元気だったら、と思う。相変わらず、いろんなものを読んで、新しい作品展開を試みたんじゃないかと思う。もし、東京など多くの人たちの目に触れる機会で兼三さんの作品が発表されていたら、とそのことを残念にも口惜しくも思う。

柏田省吾　かしわだ・しょうご

１９４５年、三重県生まれ。中小企業金融公庫に勤め、１９７２年３月から１９７７年の３月までの５年間宮崎支店に勤務した。日岡兼三と深い交流をもち、転勤したのちも日岡が亡くなるまで交流を続けた。長女が画家となり東京で活躍しているが、美大受験の際にひと夏を兼三のアトリエで徹底的にしごかれたことも、親子を通じての兼三との忘れがたい思い出である。現在は東京都在住。

先生・日岡兼三について

横山　仁美

兼三先生が亡くなる直前言った、「やるのは今しかない。今という時間しかないんだぞ。明日はやって来ないんだ。今出来ることは今やれ。今描けるものは今描け」という言葉が、人生の岐路に立つ時、繰り返し私に呼び掛けてくる。

造形作家として、人間として厳しく己を追求し続けた兼三先生の、重みのある言葉。簡潔でありながら深く、真実味を持って訴えてくるのに、実行するのが難しい。先生はこうも言った。「俺は余命を告げられて死が目前に見えた。今までとは違う次元でものが見えるんだ。」大学２年生の夏、半年ぶりに会った先生は、肺がんが骨や目にまで転移し、視力が急激に低下、痩せ細って体力も極限の状態だった。「俺はもうこの夏を越えられない。自分で解る。帰ってきて最後の生徒を見てくれ。」先生のその言葉を受けて、夏休みのあいだ私は広島から宮崎に帰省し、絵画教室を任されたのだった。病気の痛みに耐えながら、先生は教室で生徒を叱咤し、亡くなる最後の日まで筆を持ち、ものを作るのを止めなかった。気迫の塊そのもの。兼三先生がそうまでして伝えたかったこと、残したかった、作りたかったものとは何だったのだろう。

私が初めて兼三先生に会ったのは高校３年生の冬、もう受験は目の前、という時だった。高校の美術室でひたすらデッサンをしていた私を見兼ねて、同級生が日岡絵画教室に連れて行ってくれたのだ。先生は私が絵画教室に持って行った作品を見て「全部ダメ」といい放ち、同行した母に「お宅のお子さんは絶対に受かりません。浪人を覚悟して下さい。」と告げた。兼三先生ほど単刀直入な大人に会ったのは初めてでとても驚いたのを覚えている。しかし先生は単刀直入なだけではなく、誠心誠意、命の限りを尽くし、自分の仕事に没頭する人間だった。その気合いは自然と絵画教室の生徒にも伝わり、受験に向けてのデッサンの訓練を後押しした。実際、絵を描く手が止まれば「手を止めるな！描け！」「バカの考え休むより悪い」と罵詈雑言にも思える叱咤が飛んで来るし、私語をしようものなら「しゃべるな！」とげんこつをお見舞いされる。いま学校にこんな教師がいれば、暴力教師としてすぐさまマスメディアに取り立たされるのだろう。しかし一見乱暴に過ぎるその指導法の底にある、先生の心根の暖かさは沢山の生徒の心に届いていたと思う。生徒の人生、受験を自分のことのように受け止め、後押ししてくれてた先生。そしてそれぞ

れの家庭の事情、精神状態を考慮し、生徒と正面から向き合ってくれた。例えば、経済的に困窮している生徒がいれば、何かと自分の制作を手伝わせ、それに対して日給を払う。デッサンの腕が上達してくれば、参考作品として買い取ってくれる。少食の生徒を心配し、太らせようと手作りの料理をこれでもかとご馳走してくれる（少食の本人にとっては迷惑だったかも？）。複雑な事情を抱えた生徒を近所の森に連れ出し、何ともない会話をしながら散歩する。先生の気遣いは愚直な程飾り気がなく、まっすぐに心に届くものばかり。兼三先生が私にとって（きっと多くの生徒にとって）絵だけではなく、人生の師でもある所以である。先生は本当にたくさんのことを教えてくれた。

絵画教室の掃除は生徒が当番でしていたのだが、先生は一緒に床を磨きながら、床は丁寧に磨くこと、トイレを隅々まで掃除すること、手を拭くタオルの端をきちんと揃えるように諭す。鉛筆をきれいに研ぐこと、絵の具を使った後、蓋のまわりを拭くこと、道具入れを整理整頓すること。良書を沢山読み、世界を広く知り、自分の目で見、考え、思想を深めていくことの大切さ。誰かの考え、兼三先生の教えにすら寄り掛かってはいけないこと。生きとし生けるもの、全ての存在それぞれに神が宿っていること。自然は最高の師であること。友人ほど大切なものはないこと。それらの言葉は先生の生き方そのものだった。

先生が亡くなって１０年以上が経つ。「今出来ることを焦らず止まらずやれ」「何にも囚われず、今に集中しろ」「余計なことを考えるな」先生の簡潔で力強い言葉が、すっと吸い込まれるような瞬間がある。思い悩んで苦しんで八方塞がりになった時、心の重荷を手放して自分の生を懸命に生ききるしかないのだ、と突然府に落ちる。「人間は独りだ」「俺が描いているのは辛い孤独じゃない。静かで気持ちのいい孤独だ」先生はそう言った。そう、人間は孤独なのだ。でもそれを深いところで受け入れた時、人は誰よりも強くなれ、そして自由になる。孤独であるからこそ、全ての存在と繋がっていられるのだ。

たった一つの個性的な存在でありながら常に世界の一部なのだと感じることが出来る今、兼三先生もやはり、誰かが彼を必要とする時、いつでも傍にいてくれるのだ、と思う。兼三先生との出会い、先生を最期まで支えたご家族、それらがくれた全ての縁に感謝を捧げます。

横山仁美（よこやま・ひとみ）
１９８１年宮崎県生まれ。高校３年生のときに兼三と出会い、指導を受ける。広島市立大学油絵科大学卒業。大学進学後も兼三が没するまで頻繁に交流を持ちながら指導を受け続けた。現在も制作活動を精力的に行っている。

展覧会を開催するにあたって

青井　美保

美術と向き合う仕事をし始めてから、この宮崎という地でさまざまな世代の画家たちから、ときたま聞こえる名前があった。それが日岡兼三という人だった。つい１２年前まで活躍していた造形作家（と、本人は称していたという）だが、その情報は少なく、作品の全貌も掴めずにいた。残念ながら私が最初に鑑賞した日岡氏の作品は、没後２年たってから開催された展覧会で、ちょうど私は学芸員実習で宮崎県立美術館に約２週間通った時期だった。しんとした展示室は空間が青で支配されており、不思議とその時の光景はまぶしいほどにはっきりと記憶している。たくさんの美術作品と出会ってきたが、まだ私はそういう心境になったことが数えるほどしかない。

その後、夫人の美穂さんとは美術の研究会でお会いする仲となった。私は、少しずつ宮崎の現代美術家たちに関心の強まっていた時期であったこともあり、いつかは美穂さんから兼三氏のことが聞けるのではないかという仄かな期待もあった。しかし結局聞けないまま美穂さんは兼三氏の没後、県外へ移住されてしまった。

宮崎の現存するアーティストにスポットを当てた展覧会の実施を強みとした高鍋町美術館での勤務が決まったときに、最初に思い浮かんだのが、日岡兼三氏であった。兼三氏にお会いしたこともない私が、いったい彼がどんな思いを持って、どのような作品の制作を変遷していったのかを辿る行為は、なんとも不思議な作業であった。展覧会を開催したいと夫人にご相談したとき、美穂さんは初めて兼三氏のさまざまな話をしてくださった。目の前に、生前の兼三氏がいるような情景が浮かんだ。それは、私にとって今回の展覧会を実施するうえでとても重要なことであった。

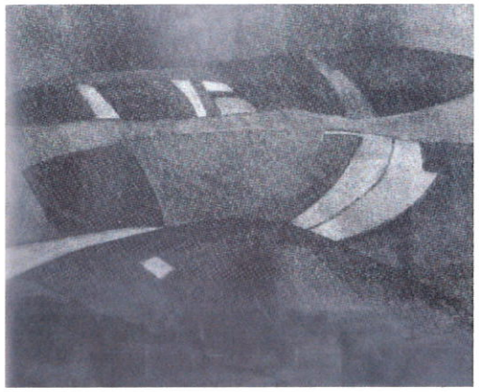
アーティストが没した後、残された人たちがどうするか、ということはこれまでの美術史を見ても決して軽視できないことである。しかしその負担は重く、思ったように作品の保存などができずにいることは、ままある。美穂さんは、兼三氏の没後、作品を整理されたあと、作品や記録資料を大切に保管され続けてきた。それは容易なことではないし、それが無ければ今回の展覧会は実現できなかった。「やがて私も年をとり、手に負えないときが来るでしょう」と美穂さんは静かに話した。これは、宮崎の記録に残すべき美術家たちすべてにとっての課題であり、おそらく全国的にも多発しているであろう課題だと痛感している。

展覧会というものは様々な人との縁やタイミングが合致しないと実現できない。本来ならばしっかりと研究を重ね、その結果とともに公開すべきであると感じているが、今できる限りの情報をまとめ、現存する作品を展示することから始まることもあると信じている。それを記録に残すことで、次のタイミングや研究へのバトンとして、一歩でなく半歩かもしれないが、日岡兼三という人の存在を普及することの一助となれば、これほど嬉しいことはない。

青井　美保（あおい・みほ）
１９８２年神奈川県生まれ。北九州市立大学文学部卒業。宮崎県立美術館、みやざきアートセンターを経て、現在は高鍋町美術館にて学芸員として勤務している。

企画展「日岡兼三展」は、２０１５年１０月２４日（土）～１１月２３日（月・祝）に高鍋町美術館にて開催された。

油彩

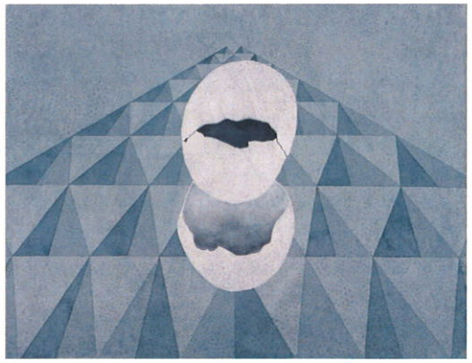


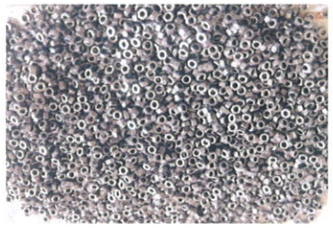
１９７５年発表
「山畑Ｉ」
宮崎日日新聞総合美術展
絵画部門　奨励賞
審査員　坂本善三・米良道博
「風景の抽象がは難しく、ピカソでさえうまくいかなかった。これは遠近とか山、畑などにこだわらなかった点に面白さがあり、成功した。」とある。（審査員評より）

オブジェと写真

１９８８年発表
「絵・写真・オブジェ展」
卵や写真フィルムの箱の中に、石膏を流し込み制作した白いオブジェを積み重ねるなどして形をつくり、白黒写真で写すという方法をとった。この展示より陶土の作品も発表している。この後、写真のみを作品として発表することはなかったが、カメラは常に手元に置いていた。

墨を使用した絵画１





使用したナット

１９９６年発表

「時の凝固」「堆積するとき」

全紙に１センチ四方の金属（ボルト、ナット等）を隙間なく並べ、青墨を流した。金属の底が白く跡を残し、幾何学模様のようなものが画面に広がる。その中央に静物を描いている。

墨を使用した絵画２

１９９７年発表

「空間から時間へ」

１９９７年から１９９９年の３年間、折り込み箱の底をモチーフとした作品の発表をしている。箱の底の四辺の紙の重なりの影を捉え、描かれている。１９９８年には会場の半分を、１９９９年には会場全面を３段掛けのパネルが覆い尽くした。

インスタレーション

２００１年発表

「時」

２００３年までに３作品を発表。壁面は３作とも青色で覆い尽くしており、床上の種子は１作目は素焼きの陶土、２作目は白い球状、３作目は鉄板状のものへと展開している。偶然性を取り入れる制作方法は発展し、この作品では制作プランに多くの友人たちの作為が取り入れられていることも特徴といえる。

虫をモチーフとした絵画

２００７年発表

「蟲」

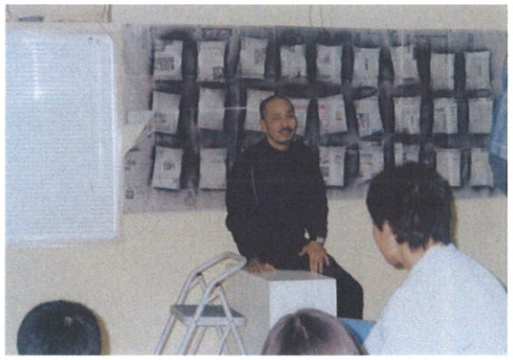
１９７９年～１９８５年を中心に描かれつづけた虫をモチーフとした作品。兼三の手元には昆虫図鑑や昆虫に関する新聞記事の切り抜きなどが置かれていた。生前未発表であったため、没後回顧展として発表された。

１９９９年

宮日会館にて

２００１年

宮崎空港にて



２００１年

ノイエ・アート・スペースにて

２００２年

宮崎県立美術館にて

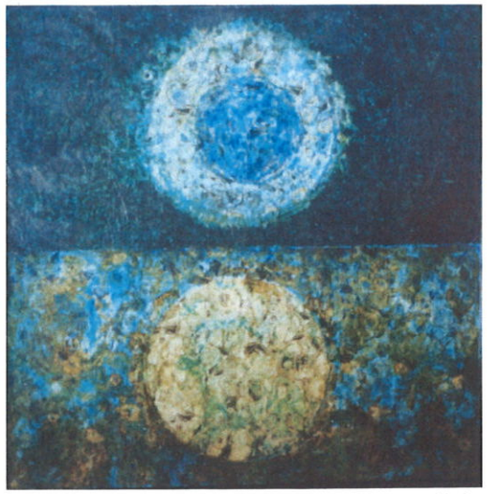
現在保管されている作品（抜粋）

窓

鳥

母

ギプス



抽象

現在保管されている作品（図説）

※縦型の作品は紙面の都合上、左向きに回転して掲載されています。

[1]1鳥

[2]2-2パン(テーブル)

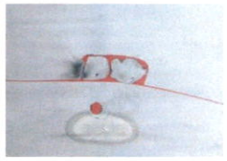
[3]4新納直之像

[4]5-1虫

[5]6風景

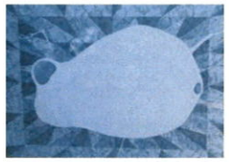
[6]7-2木

[7]8-2抽象


[8]9-2抽象

[9]10鳥

[10]11蟲


[11]12蟲

[12]13-2抽象

[13]15-2蟲ー1

[14]16-2蟲ー2

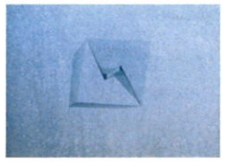
[15]17靴

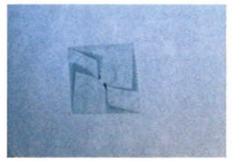
[16]18-2花

[17]19魚

[18]20ひも

[19]21-2箱


[20]22-2箱

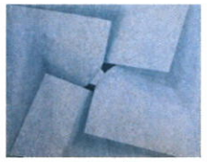

[21]23箱

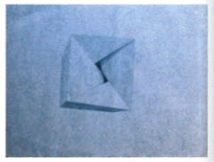
[22]24-2箱

[23]25箱

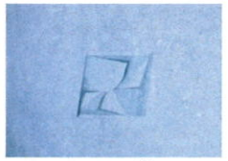
[24]25-3

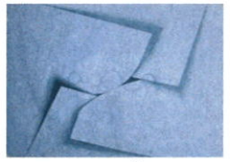
[25]26箱


[26]27箱


[27]28箱

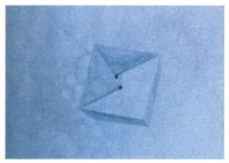
[28]29-2箱

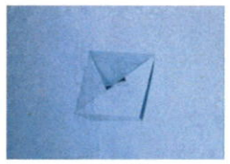

[29]30-2箱

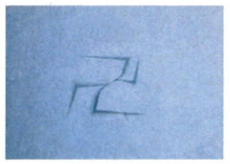

[30]31箱

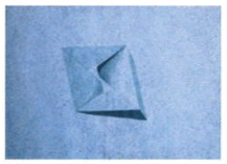
[31]32-2箱

[32]33-2箱

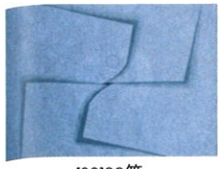

[33]34-2箱


[34]35箱

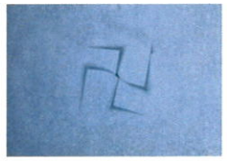

[35]36-2箱


[36]37箱

[37]38箱


[38]39箱

[39]40箱


[40]41箱

[41]42-3母の像

[42]43種

[43]44-2本

[44]45-2本

[45]46種

[46]47-1種（グループ1）

[47]47-2種（グループ2）

[48]47-3種（グループ3）

[49]48「時（2002-1）」床パネル

[50]49-3種

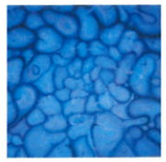
[51]50-3種

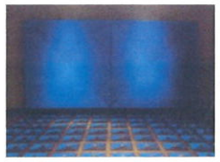
[52]51種

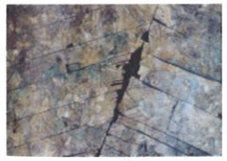
[53]52-2種

[54]53-6銅板

[55]54-2目玉


[56]55-2卵

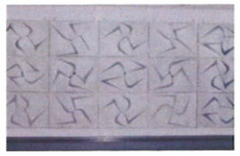

7)57「時（2002-1）」壁面パネ


[58]58抽象

[59]59-3抽象

[60]60窓

[61]61-2空き缶


[62]62-2空間から時間へ

[63]63「時2003」床鉄板

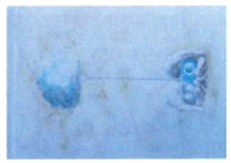
[64]64「時2003」壁面版画

[65]65たばこ

[66]66-2水差し

[67]67-3鳥・テーブル

[68]68-2ブーツ


[69]69-2たまごの花

[70]70-2甲殻類

[71]71ピーマン

[72]72-2骨と蟲

[73]73N嬢

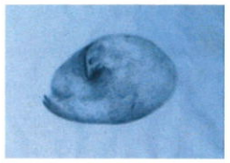
[74]74-2「時」試作

[75]75-2「時」試作

[76]76-2CG

[77]77-2CG

[78]78-2CG


[79]79-2鳥

[80]80-2虫

[81]81-2虫

[82]82虫

[83]83-3目、鳥、卵

[84]84-2風景

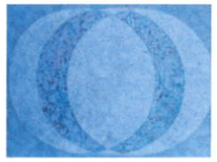
[85]85-2人物

[86]86手

[87]87洋梨

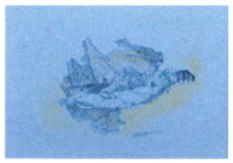
[88]88-2虫

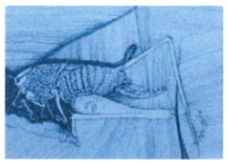
[89]89-3植物


[90]90抽象

[91]91-2鳥（羽）

[92]92虫


[93]93虫(みのむし)


[94]94-2虫

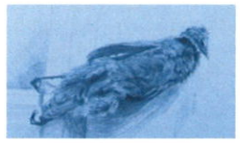
[95]95-2虫

[96]96虫

[97]97-3虫（バッタ）

[98]98-3柘榴、虫

[99]99-3虫


[100]100-2鳥

[101]101-2抽象

[102]102-3抽象

[103]102抽象

[104]104-2抽象

[105]106-2「時」試作

[106]107-2ブックカバー

[107]108-2ブックカバー

[108]109母

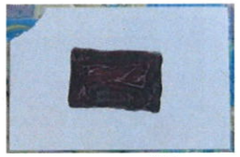
[109]110-3抽象

[110]110-5抽象

[111]110-8抽象

[112]110-10抽象

[113]110-11母


[114]110-13抽象

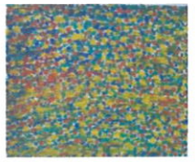
[115]110-16鳥

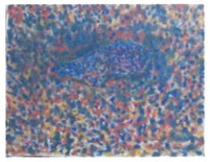
[116]110-18母

[117]111-3母　五月雨子

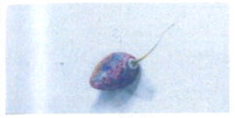
[118]112-3抽象

[119]113-3自画像


[120]114-2抽象


[121]115-2抽象

[122]116母

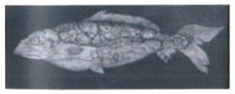

[123]117静物画

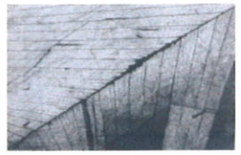
[124]118-2母

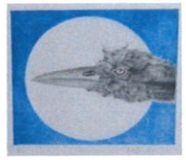
[125]119-2目、虫

[126]120-3花

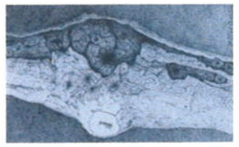
[127]121-3花

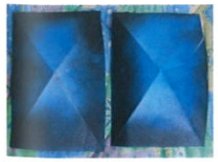

[128]122-2魚


[129]123風景


[130]124鳥

[131]125-3鳥


[132]126-3木


[133]127「時」試作

[134]128「時」試作

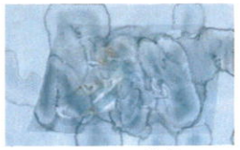
[135]129-2「時」試作

[136]130-1果実

[137]131魚

[138]132-2扉

[139]133-2目、卵、鳥

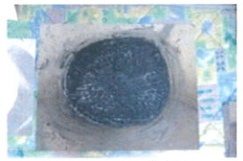

[140]134-2抽象

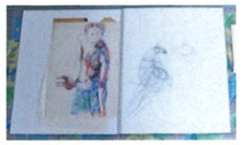
[141]135-2試作

[142]136-2凸版

[143]137-3凸版

[144]137-4凸版


[145]137-5凸版


[146]138-2スケッチブック

[147]139スケッチブック

[148]140-2スケッチブック

149]141-2スケッチブッ

[150]142-2抽象

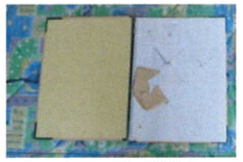
[151]142-3抽象

[152]143-3スケッチブック

[153]144スケッチブック

[154]145スケッチブック

[155]146スケッチブック


[156]147スケッチブック

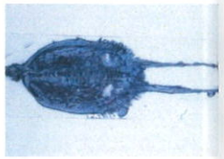
[157]148スケッチブック

[158]149スケッチブック

[159]150スケッチブック

[160]151スケッチブック

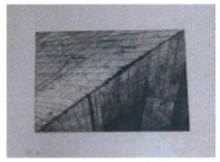
[161]152抽象


[162]152-2抽象

[163]152-3魚（銅板）

[164]152-4手、虫（クロッキー）

[165]152-5鳥


[166]152-6風景

[167]152-7抽象

[168]152-8木と虫

[169]152-9鳥

[170]152-10猿

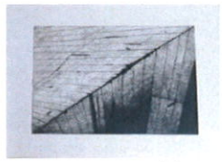
[171]152-12猿

[172]152-14鳥（アルミ板）

[173]152-15鳥

[174]152-17鳥

[175]152-18母

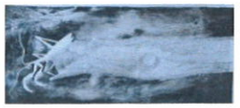

[176]152-20風景

[177]152-22顔

[178]153顔

[179]153-2風景

[180]153-4木と虫（アルミ板）


[181]153-5木と虫（アルミ板）

[182]153-6木と虫（アルミ板）

[183]153-7木と虫（アルミ板）

[184]153-8木と虫（アルミ板）

[185]153-9顔（アルミ板）

[186]153-10顔（アルミ板）

[187]153-11顔（アルミ板）

[188]153-12顔（アルミ板）

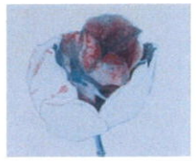
[189]154エッチング銅板

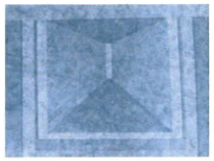
[190]155木版原板

[191]156パッタ

[192]156-2鳥

[193]156-3口、目


[194]156-6花


195]157-3時の堆積（部屋）

96]157-4時の堆積（トンネ

197]157-5時の堆積（部屋）

98]157-6時の堆積（トンネル

199]157-7時の堆積（部屋

[200]157-8時の堆積（袋）

[201]157-9時の堆積（鳥）

202]157-11時の堆積（植物

[203]157-12森の記憶

204]157-14時の堆積（抽象

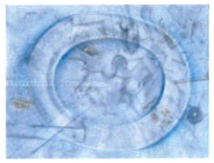
205]157-15時の堆積（円柱

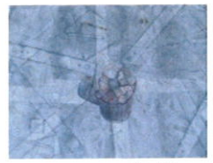
06]157-16時の堆積（円すし

07]157-17時の堆積（円すし

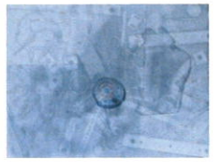
[208]157-18時の堆積（円）

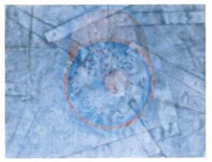
[209]157-19時の堆積（円）


[210]157-20皿


[211]157-21ハンドル

[212]157-22チェーン


[213]157-23栓

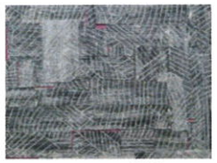

[214]157-24ざくろ

[215]157-25抽象

[216]157-26抽象

17]158-2作品コピー（資料

[218]159 -1抽象


[219]159-2抽象

[220]159 -3抽象

[221]159 -4抽象

[222]159-5抽象

[223]159 -6抽象

[224]159 -7抽象

[225]159-8抽象

[226]159- 9抽象

[227]159 -10抽象

[228]159 -11抽象

[229]159 -12抽象

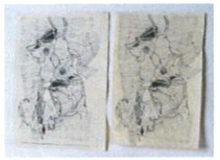
[230]159 -14抽象

[231]159 -15抽象

[232]159 -16抽象

[233]159 -17抽象

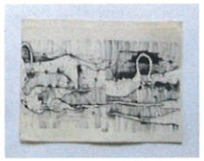
[234]159 -18抽象


[235]159 -19抽象

[236]159 -20抽象

[237]159 -21抽象

[238]159 22抽象


[239]159 -23抽象

[240]159 -24果実

[241]159 -25抽象

242]159 -26模写（ヤンセン）

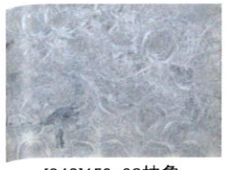
[243]159 -27模写（人物）

244]159 -28模写（ヤンセン）

[245]159-29模写（ヤンセン）

[246]159 -30抽象

[247]159 -31抽象


[248]159 -32抽象

[249]159 -33鳥

[250]159 -34抽象

[251]159 -35抽象

[252]159 -36抽象

[253]159 -37ねずみと骨

254]159 -38模写（ヤンセン

[255]159 -39抽象

[256]159 -40抽象

[257]159 -41抽象

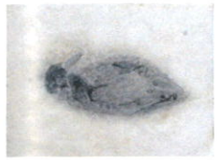
[258]159 -42模写（ヤンセン）

[259]159 -43試作

[260]159 -44試作

[261]159 -51時（2003）下絵

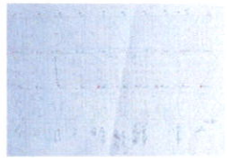
[262]160鳥


[263]160-1鳥

[264]160-2定規

[265]160-3抽象

[266]160-4抽象

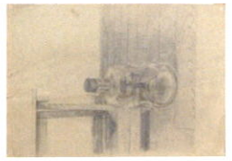

[267]160-5時（2003）下絵

[268]161石膏デッサン

[269]161-2石膏デッサン

[270]161-3手、卵

[271]161-4デッサン


[272]161-5瓶

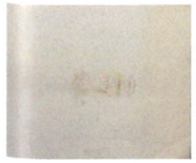
[273]161-6かに

[274]161-7人形

[275]161-8枝

[276]161-9鳥

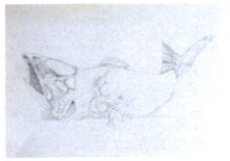
[277]161-10母の顔


[278]161-11顔

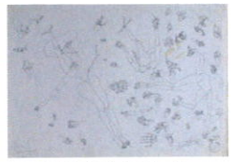
[279]161-12顔

[280]161-14手、足

[281]161-15手、足

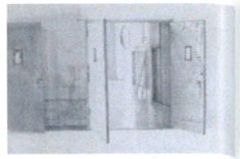

[282]161-16魚

[283]161-17手、足


[284]161-18手、足

[285]161-19手、足

[286]161-20猫


[287]161-21部屋

[288]161-23母

[289]161-25風景

90]161-26木と虫（リトグラフ下絵

[291]161-27宮城さん

[292]161-28手、足

[293]161-29鳥

[294]161-30顔

[295]161-31顔

[296]161-32顔

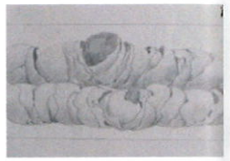
[297]161-33自画像

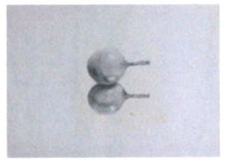
[298]161-34鳥

[299]161-35卵

[300]161-36魚

[301]161-37鳥


[302]161-39卵


[303]161-40果実

[304]161-41妻

[305]161-42鳥

6]161-44木と虫（リトグラフ下絵

07]161-45顔（リトグラフ下絵

[308]161-46たばこ

[309]161-47横顔

[310]161-48虫（パーツ）

[311]161-49人物

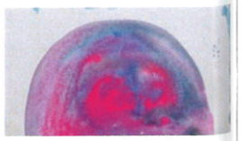
[312]161-50鳥と老婆

[313]162卵

[314]162-2抽象

[315]162-3抽象

[316]162-4花


[317]162-5抽象

[318]162-6花

[319]162-7顔

[320]162-8テーブルの桃

[321]162-9テーブルの柿

[322]162-10骨

[323]162-11石膏

[324]162-12卵

[325]162-13抽象

[326]162-14抽象

[327]162-15貝

[328]162-16カメラ

[329]162-17魚、鳥

[330]162-18顔

[331]162-19抽象

[332]162-20少女

[333]162-21抽象

[334]162-22抽象

[335]162-23抽象

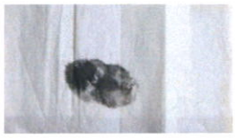
[336]162-24鳥、花

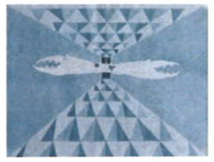
[337]162-25抽象

[338]162-26抽象

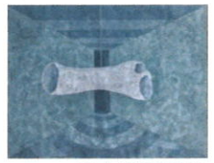
[339]162-27抽象

[340]162-28抽象


[341]162-29猿

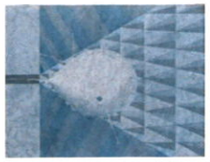

342]163時の堆積（蟹の爪）

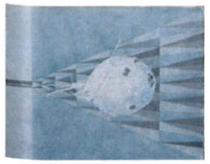
343]163-2時の堆積（ギブス

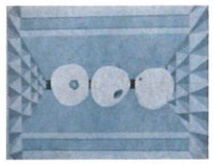

344]163-3時の堆積（ギブス

[345]163-4時の堆積（骨）

46]163-5時の堆積（骨、焦

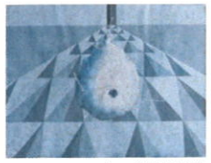

[347]163-6時の堆積（巣）


[348]163-7時の堆積（巣）


3-8時の堆積（イソギンチャ

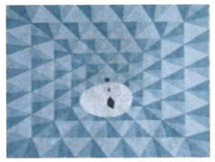
[350]163-9時の堆積（卵）

[351]163-10時の堆積（卵）


[352]163-11時の堆積（巣）

53]163-12時の堆積（ギブフ

[354]163-13時の堆積（卵）


[355]163-14時の堆積（卵）

[356]163-15抽象

357]164海老、角、キューフ

[358]164-2パイプ、手、骨

[359]164-3果実

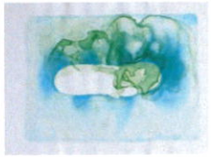
[360]164-4手、パイプ

[361]164-5はんごう

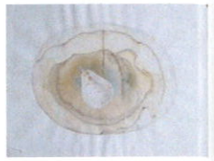
[362]164-6靴

[363]164-7抽象

[364]164-8鳥


[365]164-9卵

[366]164-10自画像


[367]164-11洋梨

[368]164-12パイプ、海老

[369]164-13パイプ、手

[370]164-14魚、手

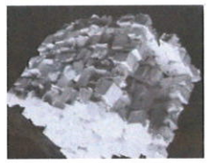
[371]164-15人形

[372]164-16靴、魚

[373]164-17蟹の爪

[374]164-18魚

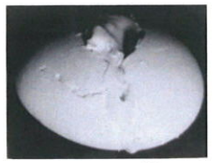
[375]164-20骨


[376]165キューブ

[377]165-2卵

[378]165-3キューブ

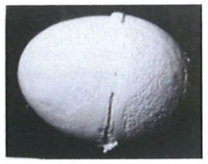
[379]165-4卵


[380]165-5卵

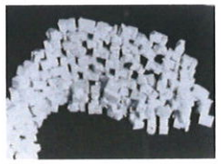
[381]165-6卵

[382]165-7卵

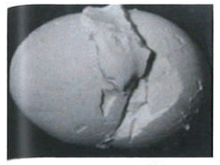
[383]165-8キューブ

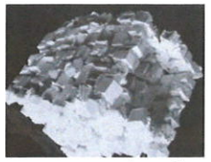

[384]165-9卵

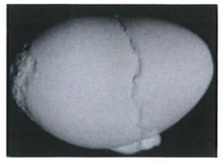
[385]165-10卵


[386]165-11キューブ

[387]165-12キューブ


[388]165-13卵


[389]165-14キューブ


[390]165-15卵

[391]166卵

[392]166-2ひまわりの種

[393]166-3枯葉

[394]166-4魚、顔

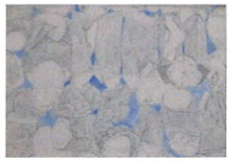
[395]166-5魚

[396]166-6魚

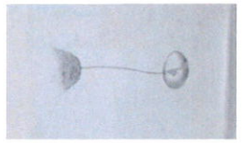
[397]166-7卵

[398]166-8卵の殻

[399]166-9鳥


[400]166-10空き缶

[401]166-11貝


[402]166-12たまごの花

[403]166-13魚

[404]166-14巣

[405]166-15巣

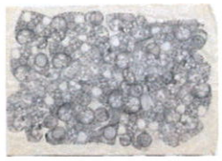
[406]166-16鳥

[407]166-17抽象

[408]166-18ほおずき

[409]166-19果実、花

[410]166-20蟹


[411]166-21抽象

[412]166-22鳥

[413]166-23風景

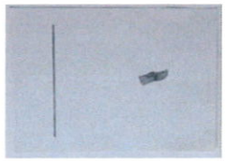
[414]166-24靴

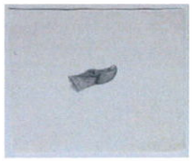
[415]166-25抽象

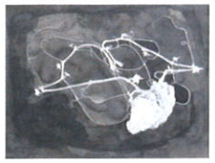
[416]166-26鳥（下絵）

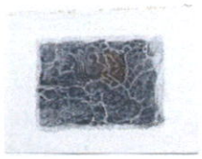
[417]166-27抽象

[418]166-28植物


[419]166-29指（コピー）


[420]166-30指


[421]166-31植物


[422]166-32植物

[423]166-33植物

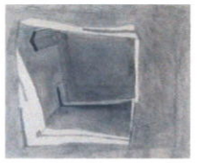
[424]166-34花

166-35落合真澄氏のための

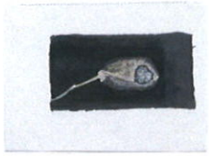
-36落合真澄氏のための挿絵

[427]166-37頭蓋骨

[458]170抽象


[459]171抽象

[428]166-38植物

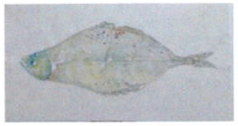

[429]166-39植物

[430]166-40抽象

[431]166-41魚

[432]166-42鳥

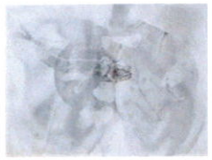
[433]166-43自画像35歳

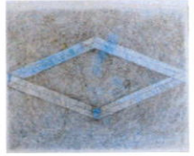

[434]166-44魚

[435]166-45虫

[436]166-46蝶

[437]166-47頭蓋骨

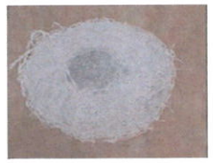

[438]166-48魚


[439]166-49抽象

[440]166-50虫

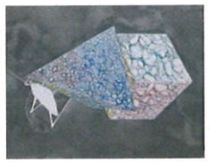
[441]166-51虫

[442]166-52鳥


[443]166-53巣

[444]166-54鳥

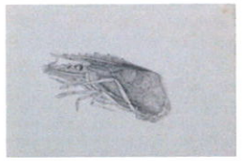
[445]166-55鳥


[446]166-57虫

[447]166-58虫

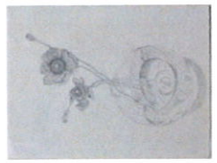
[448]166-59鳥

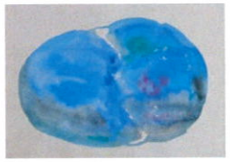
[449]166-6靴下0


[450]166-61海老

[451]166-62抽象

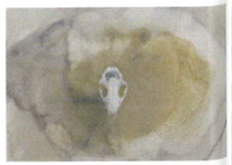
[452]166-63果実


[453]166-64花瓶


[454]166-65抽象

[455]167-2骨

[456]168人物


[457]169-2骨

通し番号	記録番号1	記録番号2	タイトル	素材	額装	サイン	推測される時期	その他の情報
1	1		鳥	紙、ペン、墨、水彩	あり		弟・春雄氏の死から結婚まで	83.5.26
2	2	2	パン(テーブル)	紙、鉛筆、墨、水彩	あり		結婚後2	
3	4		**新納直之像(にいろなおゆきぞう)**	紙、鉛筆	あり	あり	結婚後2	1994
4	5	1	虫	紙、ペン	あり		弟・春雄氏の死から結婚まで	
5	6		風景	紙、ペン	あり	あり	結婚後2	
6	7	2	木	紙、ペン、水彩	あり		結婚後2	
7	8	2	抽象	紙、アクリル絵具	あり		家を建て、室内に飾るための作品を制作時のもの	
8	9	2	抽象	色紙、墨	あり		弟・春雄氏の死から結婚まで	
9	10		鳥	油彩	あり		結婚後2	
10	11		蟲	紙、ペン、墨	あり		ボルトシリーズ未完(死の直前)	
11	12		蟲	紙、ペン、墨	あり		ボルトシリーズ未完(死の直前)	
12	13	2	抽象	樹脂、絵具	あり			柏田氏の作品(日岡兼三所蔵)
13	15	2	**蟲—1**	墨、絵具、ボルト	あり			柏田氏所蔵
14	16	2	**蟲—2**	墨、絵具、ボルト	あり			柏田氏所蔵
15	17		靴	紙、水彩			結婚後2	
16	18	2	花	紙、水彩			結婚後2	
17	19		魚	紙、水彩、ペン			結婚後2	
18	20		ひも	紙、水彩、鉛筆			結婚後2	
19	21	2	箱	紙、墨、ボルト	あり		箱の底シリーズ	P2
20	22	2	箱	紙、墨、ボルト	あり		箱の底シリーズ	P7
21	23		箱	紙、墨、ボルト	あり		箱の底シリーズ	
22	24	2	箱	紙、墨、ボルト	あり		箱の底シリーズ	P1
23	25		箱	紙、墨、ボルト	あり		箱の底シリーズ	
24	25	3	箱	紙、墨、ボルト	あり			P8
25	26		箱	紙、墨、ボルト	あり		箱の底シリーズ	P3
26	27		箱	紙、墨、ボルト	あり		箱の底シリーズ	
27	28		箱	紙、墨、ボルト	あり		箱の底シリーズ	P5
28	29	2	箱	紙、墨、ボルト	あり		箱の底シリーズ	
29	30	2	箱	紙、墨、ボルト	あり		箱の底シリーズ	
30	31		箱	紙、墨、ボルト	あり		箱の底シリーズ	
31	32	2	箱	紙、墨、ボルト	あり		箱の底シリーズ	P4
32	33	2	箱	紙、墨、ボルト	あり		箱の底シリーズ	
33	34	2	箱	紙、墨、ボルト	あり		箱の底シリーズ	
34	35		箱	紙、墨、ボルト	あり		箱の底シリーズ	
35	36	2	箱	紙、墨、ボルト	あり		箱の底シリーズ	
36	37		箱	紙、墨、ボルト	あり		箱の底シリーズ	
37	38		箱	紙、墨、ボルト	あり		箱の底シリーズ	
38	39		箱	紙、墨、ボルト	あり		箱の底シリーズ	

39	40		箱	紙、墨、ボルト	あり		箱の底シリーズ	
40	41		箱	紙、墨、ボルト	あり		箱の底シリーズ	
41	42	3	**母の像**	油彩	あり		結婚後アクリル画移行期まで	
42	43		種	陶器			空港展にて発表	割れあり
43	44	2	本	陶器			小林順一氏のところで個展をしたころ	ひびあり
44	45	2	本	陶器			小林順一氏のところで個展をしたころ	ひびあり
45	46		種	陶器			青のシリーズ(死の直前)	青のシリーズではない
46	47	1	種(グループ1)	陶器			青のシリーズ(死の直前)	数式あり、青のシリーズ
47	47	2	種(グループ2)	陶器			青のシリーズ(死の直前)	数式あり、青のシリーズ
48	47	3	種(グループ3)	陶器			青のシリーズ(死の直前)	数式あり、青のシリーズ
49	48		「時(2002-1)」床パネル	ベニヤ、着色			青のシリーズ(死の直前)	種の下に敷く
50	49	3	種	陶器			空港展にて発表	数式あり
51	50	3	種	陶器			空港展にて発表	
52	51		種	陶器			空港展にて発表	数式あり
53	52	2	種	陶器、ブロンズメッキ			空港展にて発表	ブロンズメッキ、数式あり
54	53	6	銅版	銅板			版(清水聖策氏より学ぶ)	エッチング原版
55	54	2	目玉	写真CG、コラージュ	あり		空港展にて発表	
56	55	2	卵	油彩			英展にて発表	第9回英展出品
57	57		「時(2002-1)」壁面パネル	壁面作品、ベニヤ、ペンキ			青のシリーズ(死の直前)	
58	58		抽象	ペン、油彩			弟・春雄氏の死から結婚まで	
59	59	3	抽象	ペン、アクリル			弟・春雄氏の死から結婚まで	
60	60		**窓**	油彩			弟・春雄氏の死から結婚まで	
61	61	2	空き缶	ペン				
62	62	2	**空間から時間へ**	墨、ボルト			箱の底シリーズ	
63	63		「時(2003)」床鉄板	鉄板			宮日会館で発表、及び試作(死の直前)	床に敷く鉄板
64	64		「時(2003)」壁面版画	紙、アクリル絵具	あり		宮日会館で発表、及び試作(死の直前)	壁面作品
65	65		たばこ	紙、ペン	あり		弟・春雄氏の死から結婚まで	
66	66	2	水差し	紙、アクリル絵具	あり		結婚後2	
67	67	3	鳥・テーブル	紙、水彩、鉛筆	あり		時の堆積	テーブルの上シリーズ
68	68	2	ブーツ	油彩	あり		光風会所属時	
69	69	2	**たまごの花**	紙、鉛筆、水彩	あり		ボルトシリーズ前	
70	70	2	甲殻類	紙、ペン、水彩	あり		ボルトシリーズ前	
71	71		ピーマン	紙、ペン	あり		結婚後	
72	72	2	骨と蟲	紙、ペン、色えんぴつ	あり	あり	結婚後	
73	73		**N嬢**	紙、鉛筆	あり	印あり	ボルトシリーズの前	
74	74	2	「時」試作	紙、アクリル、ベニヤ			青のシリーズ(死の直前)	
75	75	2	「時」試作	紙、アクリル、ベニヤ			青のシリーズ(死の直前)	
76	76	2	CG	出力用紙	あり		フラクタスに入ったころ	
77	77	2	CG	出力用紙	あり		フラクタスに入ったころ	
78	78	2	CG	出力用紙	あり		フラクタスに入ったころ	

79	79	2	鳥	和紙、木炭	あり		結婚後	
80	80	2	虫	紙、マーブリング、ペン、絵具	あり		弟・春雄氏の死から結婚まで	
81	81	2	虫	紙、ペン、絵具	あり		弟・春雄氏の死から結婚まで	
82	82		虫	紙、ペン、絵具	あり		弟・春雄氏の死から結婚まで	スケッチブック、ワトソンP2
83	83	3	目、鳥、卵	紙、ペン	あり(マットなし)		結婚後	
84	84	2	風景	紙、マーブリング、ペン、クレヨン	あり(マットなし)		弟・春雄氏の死から結婚まで	
85	85	2	人物	紙、鉛筆、水彩	あり		ボルトシリーズの前	
86	86		手	紙、鉛筆、水彩	あり		ボルトシリーズの前	
87	87		洋梨	油彩	あり		結婚後2	
88	88	2	虫	紙、ペン	あり		弟・春雄氏の死から結婚まで	
89	89	3	植物	紙、ペン、墨、水彩	あり		結婚後	
90	90		抽象	紙、ボルト、墨、水彩	あり		時の堆積	
91	91	2	鳥(羽)	紙、鉛筆、水彩	あり		結婚後(水彩)	2枚1組
92	92		虫	紙、色鉛筆	あり		結婚後	2枚1組
93	93		虫(みのむし)	紙、ペン、彩色	あり	あり	結婚後	
94	94	2	虫	紙、ペン	あり		弟・春雄氏の死から結婚まで	スケッチブックP3
95	95	2	虫	紙、ペン	あり		弟・春雄氏の死から結婚まで	スケッチブックP1
96	96		虫	ペン、マーブリング	あり		弟・春雄氏の死から結婚まで	
97	97	3	虫(バッタ)	ペン、マーブリング	あり		結婚後	
98	98	3	柘榴、虫	紙、ペン	あり	あり	結婚後	
99	99	3	虫	紙、ペン、色えんぴつ	あり		春雄さんの死から結婚まで	
100	100	2	鳥	紙、鉛筆	あり	あり	結婚後	
101	101	2	抽象	厚紙、アクリル絵具、鉛筆	あり		死の直前(森本泰隆氏蔵)	
102	102	3	抽象	厚紙、アクリル絵具、鉛筆	あり		死の直前(森本泰隆氏蔵)	
103	102		抽象	厚紙、アクリル絵具、鉛筆	あり		死の直前(森本泰隆氏蔵)	
104	104	2	抽象	厚紙、アクリル絵具、鉛筆	あり		死の直前(森本泰隆氏蔵)	
105	106	2	「時」試作	出力用紙				
106	107	2	ブックカバー	出力用紙			結婚後	
107	108	2	ブックカバー	出力用紙(CG出力)		本(俳人・蝉丸氏)の装丁のアイデア(一番右のみ作品)		
108	109		母	エッチング	あり(マットなし)		版(清水聖策氏より学ぶ)	
109	110	3	抽象	紙、凸版、水彩			宮日会館で発表、及び試作(死の直前)	
110	110	5	抽象	紙、凸版、水彩			宮日会館で発表、及び試作(死の直前)	
111	110	8	抽象					
112	110	10	抽象					
113	110	11	母	リトグラフ			版(清水聖策氏より学ぶ)	
114	110	13	抽象	デカルコマニー			版(清水聖策氏より学んだあと)	
115	110	16	鳥	リトグラフ			版(清水聖策氏より学ぶ)	
116	110	18	母	リトグラフ			版(清水聖策氏より学ぶ)	
117	111	3	母　五月雨子	紙、油彩	あり(マットなし)		光風会所属時	7.9.49
118	112	3	抽象	ペン	あり	あり	結婚後	

119	113	3	自画像	キャンバス、油彩			結婚後アクリル画移行期まで	
120	114	2	抽象	キャンバス、油彩			光風会所属時	
121	115	2	抽象	キャンバス、油彩			光風会所属時	
122	116		母	エッチング	あり			5/20(日付か)
123	117		静物画	紙、水彩	あり(マットなし)		結婚後	
124	118	2	母	エッチング	あり	あり	版(清水聖策氏より学ぶ)	5/20(日付か)
125	119	2	目、虫	ペン	あり		弟・春雄氏の死から結婚まで	
126	120	3	花	リトグラフ	あり	あり	版(清水聖策氏より学ぶ)	1/10(日付か)
127	121	3	花	油彩	あり		結婚後アクリル画移行期まで	
128	122	2	魚	エッチング	あり		版(清水聖策氏より学ぶ)	
129	123		風景(風の扉)	エッチング	あり		版(清水聖策氏より学ぶ)	
130	124		鳥	リトグラフ	あり	あり	版(清水聖策氏より学ぶ)	5/20(日付か)
131	125	3	鳥	油彩	あり	あり	結婚後アクリル画移行期まで	
132	126	3	木	紙、ペン	あり	あり	結婚後	
133	127		「時」試作	紙			トークイベントで使用(がんになる前)	
134	128		「時」試作	紙				
135	129	2	「時」試作	出力用紙			トークイベントで使用(がんになる前)	
136	130	1	果実	紙、ペン		あり	結婚後	
137	131		魚	紙、ペン		あり	結婚後	
138	132	2	扉	エッチング			版(清水聖策氏より学ぶ)	
139	133	2	目、卵、鳥	エッチング			版(清水聖策氏より学ぶ)	
140	134	2	抽象	紙、水彩			ボルトシリーズ前	
141	135	2	試作	紙、アクリル絵具			結婚後	
142	136	2	凸版	アルミ板			宮日会館で発表、及び試作(死の直前)	
143	137	3	凸版	アルミ板、樹脂			版(清水聖策氏より学んだあと)	
144	137	4	凸版	アルミ板、樹脂			光風会所属時	3枚のデッサン入り
145	137	5	凸版				結婚後	
146	138	2	スケッチブック	紙、鉛筆など			結婚後アクリル画移行期まで	
147	139		スケッチブック	紙、鉛筆など			光風会所属時	1982年頃　父金助
148	140	2	スケッチブック	紙、鉛筆など			弟・春雄氏の死から結婚まで	
149	141	2	スケッチブック	紙、鉛筆など			弟・春雄氏の死から結婚まで	コラージュあり、表紙裏に「S51.1
150	142	2	抽象				結婚後アクリル画移行期まで	鳥
151	142	3	抽象				弟・春雄氏の死から結婚まで	洞窟壁画レイサン
152	143	3	スケッチブック	紙、鉛筆など			弟・春雄氏の死から結婚まで	
153	144		スケッチブック	紙、鉛筆など			箱の底シリーズ	段ボールの底イメージスケッチ
154	145		スケッチブック	紙、鉛筆など			結婚後アクリル画移行期まで	
155	146		スケッチブック	紙、鉛筆など			弟・春雄氏の死から結婚まで	
156	147		スケッチブック	紙、鉛筆など			光風会所属時	1981.6.7日　坂本朋子と西都原にて
157	148		スケッチブック	紙、鉛筆など			箱の底シリーズ	
158	149		スケッチブック	紙、鉛筆など				

159	150		スケッチブック	紙、鉛筆など				
160	151		スケッチブック	紙、鉛筆など				
161	152		抽象	デカルコマニー			空港展にて発表	
162	152	2	抽象	デカルコマニー			版(清水聖策氏より学んだあと)	
163	152	3	魚(銅板)	エッチング			版(清水聖策氏より学ぶ)	
164	152	4	手、虫(クロッキー)	紙、ペン、鉛筆			詩集(落合真澄氏)の装丁のアイデア	
165	152	5	鳥	エッチング			版(清水聖策氏より学ぶ)	
166	152	6	風景	エッチング			版(清水聖策氏より学ぶ)	
167	152	7	抽象	紙、アクリル絵具			版(清水聖策氏より学んだあと)	
168	152	8	木と虫	リトグラフ			結婚後・水墨画	
169	152	9	鳥	和紙、墨			版(清水聖策氏より学ぶ)	
170	152	10	猿	和紙、墨			結婚後・水墨画	
171	152	12	猿	和紙、墨			結婚後・水墨画	
172	152	14	鳥(アルミ板)	リトグラフ			版(清水聖策氏より学ぶ)	
173	152	15	鳥	リトグラフ			版(清水聖策氏より学ぶ)	
174	152	17	鳥	リトグラフ			版(清水聖策氏より学ぶ)	
175	152	18	母	エッチング			版(清水聖策氏より学ぶ)	
176	152	20	風景	エッチング			版(清水聖策氏より学ぶ)	
177	152	22	顔	リトグラフ			版(清水聖策氏より学ぶ)	
178	153		顔	リトグラフ			版(清水聖策氏より学ぶ)	
179	153	2	風景	エッチング			版(清水聖策氏より学ぶ)	
180	153	4	木と虫(アルミ板)	リトグラフ			版(清水聖策氏より学ぶ)	
181	153	5	木と虫(アルミ板)	リトグラフ			版(清水聖策氏より学ぶ)	
182	153	6	木と虫(アルミ板)	リトグラフ			版(清水聖策氏より学ぶ)	
183	153	7	木と虫(アルミ板)	リトグラフ			版(清水聖策氏より学ぶ)	
184	153	8	木と虫(アルミ板)	リトグラフ			版(清水聖策氏より学ぶ)	
185	153	9	顔(アルミ板)	リトグラフ			版(清水聖策氏より学ぶ)	
186	153	10	顔(アルミ板)	リトグラフ			版(清水聖策氏より学ぶ)	
187	153	11	顔(アルミ板)	リトグラフ			版(清水聖策氏より学ぶ)	
188	153	12	顔(アルミ板)	リトグラフ			版(清水聖策氏より学ぶ)	
189	154		エッチング銅版				版(清水聖策氏より学ぶ)	
190	155		木版原版				光風会所属時	
191	156		バッタ	リトグラフ			版(清水聖策氏より学ぶ)	
192	156	2	鳥	リトグラフ			版(清水聖策氏より学ぶ)	
193	156	3	口、目	リトグラフ			版(清水聖策氏より学ぶ)	
194	156	6	花	リトグラフ			版(清水聖策氏より学ぶ)	
195	157	3	時の堆積(部屋)	紙、墨、水彩				
196	157	4	時の堆積(トンネル)	紙、墨、水彩			時の堆積	
197	157	5	時の堆積(部屋)	紙、墨、水彩			時の堆積	
198	157	6	時の堆積(トンネル)					

199	157	7	時の堆積(部屋)					
200	157	8	時の堆積(袋)	紙、墨、水彩			時の堆積	
201	157	9	時の堆積(鳥)	紙、墨、水彩			時の堆積	
202	157	11	時の堆積(植物)	紙、墨、水彩、鉛筆			時の堆積	
203	157	12	森の記憶	紙、墨、水彩			時の堆積	「木と生活文化賞」受賞
204	157	14	時の堆積(抽象)	紙、墨、水彩			時の堆積	
205	157	15	時の堆積(円柱)	紙、墨、水彩、鉛筆			時の堆積	
206	157	16	時の堆積(円すい)	紙、墨、水彩			時の堆積	
207	157	17	時の堆積(円すい)	紙、墨、水彩			時の堆積	
208	157	18	時の堆積(円)	紙、墨、水彩			時の堆積	
209	157	19	時の堆積(円)	紙、墨、水彩			時の堆積	
210	157	20	皿	紙、墨、水彩			時の堆積	
211	157	21	ハンドル	紙、墨、水彩、ペン			ボルトを使用するに至るまで	
212	157	22	チェーン	紙、墨、水彩、鉛筆			ボルトを使用するに至るまで	
213	157	23	栓	紙、墨、水彩、鉛筆			ボルトを使用するに至るまで	
214	157	24	ざくろ	紙、墨、水彩、鉛筆、ペン			ボルトを使用するに至るまで	
215	157	25	抽象	紙、墨、さび			ボルトを使用するに至るまで	
216	157	26	抽象	紙、墨、さび			ボルトを使用するに至るまで	
217	158	2	作品コピー(資料)	出力用紙			弟・春雄氏の死から結婚まで	作品展開のための資料
218	159	1	抽象	紙、アクリル絵具			弟・春雄氏の死から結婚まで	
219	159	2	抽象	紙、木版、コラージュ			弟・春雄氏の死から結婚まで	
220	159	3	抽象	紙、アクリル絵具、コラージュ			弟・春雄氏の死から結婚まで	
221	159	4	抽象	紙、アクリル絵具、コラージュ			弟・春雄氏の死から結婚まで	
222	159	5	抽象	紙、アクリル絵具、コラージュ			弟・春雄氏の死から結婚まで	
223	159	6	抽象	紙、アクリル絵具、コラージュ			弟・春雄氏の死から結婚まで	
224	159	7	抽象	紙、ペン			弟・春雄氏の死から結婚まで	
225	159	8	抽象	紙、ペン			弟・春雄氏の死から結婚まで	
226	159	9	抽象	紙、ペン			弟・春雄氏の死から結婚まで	
227	159	10	抽象	紙、ペン			弟・春雄氏の死から結婚まで	
228	159	11	抽象	紙、ペン			弟・春雄氏の死から結婚まで	
229	159	12	抽象	紙、ペン			弟・春雄氏の死から結婚まで	
230	159	14	抽象	紙、ペン			弟・春雄氏の死から結婚まで	
231	159	15	抽象	紙、ペン			弟・春雄氏の死から結婚まで	
232	159	16	抽象	紙、ペン			弟・春雄氏の死から結婚まで	
233	159	17	抽象	紙、ペン			弟・春雄氏の死から結婚まで	
234	159	18	抽象	紙、ペン			弟・春雄氏の死から結婚まで	
235	159	19	抽象	紙、ペン			弟・春雄氏の死から結婚まで	
236	159	20	抽象	紙、コラージュ、ペン			弟・春雄氏の死から結婚まで	
237	159	21	抽象	紙、コラージュ、ペン			弟・春雄氏の死から結婚まで	
238	159	22	抽象	出力用紙			弟・春雄氏の死から結婚まで	

239	159	23	抽象	出力用紙			弟・春雄氏の死から結婚まで	
240	159	24	果実	紙、油彩		あり	結婚後アクリル画移行期まで	
241	159	25	抽象	アクリル絵具、デカルコマニー		あり	結婚後	S50.12.29
242	159	26	模写(ヤンセン)	鉛筆、水彩、クレヨン			結婚後(ヤンセン模写)	
243	159	27	模写(人物)	鉛筆、水彩			光風会所属時	
244	159	28	模写(ヤンセン)	水彩、ペン			結婚後(ヤンセン模写)	
245	159	29	模写(ヤンセン)	ペン			光風会所属時	
246	159	30	抽象	色紙			本の装丁のため	
247	159	31	抽象	出力用紙(ペン画)、コラージュ			結婚後アクリル画移行期まで	
248	159	32	抽象	出力用紙(ペン画)、コラージュ			結婚後アクリル画移行期まで	
249	159	33	鳥	紙、油彩			弟・春雄氏の死から結婚まで	
250	159	34	抽象	絵具、スクラッチ			家を建て、室内に飾るための作品を制作時のもの	
251	159	35	抽象	絵具、コラージュ			結婚後	
252	159	36	抽象	紙、油彩			光風会所属時	
253	159	37	ねずみと骨	紙、アクリル絵具			結婚後	
254	159	38	模写(シーレ)	水彩			結婚前(エゴンシーレ模写)	裏面に人物画あり
255	159	39	抽象	アクリル絵具、コラージュ			弟・春雄氏の死から結婚まで	
256	159	40	抽象	紙、油彩、コラージュ			弟・春雄氏の死から結婚まで	
257	159	41	抽象	アクリル絵具、墨、コラージュ			弟・春雄氏の死から結婚まで	
258	159	42	模写(ヤンセン)	鉛筆、水彩			結婚後(ヤンセン模写)	
259	159	43	試作	紙、鉛筆			日岡氏以外の人によるメモ(死の直前または死後)	
260	159	44	試作	紙、鉛筆			日岡氏以外の人によるメモ(死の直前または死後)	
261	159	51	時(2003)下絵	紙、鉛筆				
262	160		鳥	紙、墨			結婚後	裏面に鳥の絵あり
263	160	1	鳥	紙、墨			結婚後	
264	160	2	定規	紙、墨			ボルトを使用するに至るまで	
265	160	3	抽象	紙、水彩			ボルトシリーズ前	
266	160	4	抽象	紙、水彩			ボルトシリーズ前	
267	160	5	時(2003)下絵	紙、鉛筆			日岡氏以外の人によるメモ(死の直前または死後)	
268	161		石膏デッサン	紙、木炭			光風会所属時	
269	161	2	石膏デッサン	紙、木炭			光風会所属時	
270	161	3	手、卵	紙、鉛筆			結婚後	
271	161	4	デッサン	紙、鉛筆			結婚後	
272	161	5	瓶	紙、鉛筆			日岡作品でない可能性あり	
273	161	6	かに	紙、鉛筆			結婚後	
274	161	7	人形	紙、鉛筆			結婚後	
275	161	8	枝	紙、鉛筆			結婚後	
276	161	9	鳥	紙、鉛筆		あり	結婚後	
277	161	10	母の顔	紙、鉛筆			結婚後	
278	161	11	顔	紙、鉛筆			結婚後	※裏面は10(記録番号)

279	161	12	顔	紙、鉛筆			結婚後	
280	161	14	手、足	紙、鉛筆			詩集（落合真澄氏）の装丁のアイデア	
281	161	15	手、足	紙、ペン			詩集（落合真澄氏）の装丁のアイデア	
282	161	16	魚	紙、鉛筆			結婚後	
283	161	17	手、足	紙、ペン			詩集（落合真澄氏）の装丁のアイデア	
284	161	18	手、足	紙、ペン			詩集（落合真澄氏）の装丁のアイデア	
285	161	19	手、足	紙、ペン			詩集（落合真澄氏）の装丁のアイデア	
286	161	20	猫	紙、水彩絵具、コンテ			光風会所属時	1999.6.5
287	161	21	部屋	紙、鉛筆			結婚後	
288	161	23	母	紙、鉛筆				
289	161	25	風景	紙、ペン、着彩			弟・春雄氏の死から結婚まで	
290	161	26	木と虫（リトグラフ下絵）	紙、鉛筆			結婚後	
291	161	27	宮城さん	紙、鉛筆			結婚後	H15.6.7.
292	161	28	手、足	紙、ペン			結婚後	
293	161	29	鳥	紙、ペン、水彩		あり	光風会所属時	※裏面は30（記録番号）
294	161	30	顔	紙、鉛筆			結婚後	
295	161	31	顔	紙、鉛筆			結婚後	※裏面は32（記録番号）
296	161	32	顔	紙、鉛筆			結婚後	
297	161	33	自画像	紙、鉛筆			光風会所属時	
298	161	34	鳥	紙、鉛筆（コピー）			結婚後	
299	161	35	卵	紙、鉛筆			卵デッサン（宮原画廊発表の頃）	
300	161	36	魚	紙、鉛筆			結婚後	
301	161	37	鳥	紙、ペン、マーブリング		あり	弟・春雄氏の死から結婚まで	
302	161	39	卵	紙、鉛筆			卵デッサン（宮原画廊発表の頃）	
303	161	40	果実	紙、鉛筆		あり	結婚後	
304	161	41	妻	紙、鉛筆			結婚後	
305	161	42	鳥	紙、ペン、マーブリング			弟・春雄氏の死から結婚まで	
306	161	44	木と虫（リトグラフ下絵）	紙、鉛筆			結婚後	
307	161	45	顔（リトグラフ下絵）	紙、鉛筆			結婚後	
308	161	46	たばこ	紙、ペン			弟・春雄氏の死から結婚まで	
309	161	47	横顔	紙、鉛筆			光風会所属時	
310	161	48	虫（パーツ）	紙、ペン			結婚後	
311	161	49	人物	紙、クレヨン			光風会所属時	
312	161	50	鳥と老婆	紙、鉛筆			結婚後	
313	162		卵	紙、水彩		あり	卵デッサン（宮原画廊発表の頃）	
314	162	2	抽象	紙、水彩、クレヨン		あり	本の装丁のため	
315	162	3	抽象	紙、水彩、クレヨン		あり	本の装丁のため	
316	162	4	花	紙、水彩		あり	結婚後	
317	162	5	抽象	紙、水彩			結婚後	
318	162	6	花	紙、鉛筆、水彩			結婚後（水彩）	

319	162	7	顔	紙、鉛筆、水彩			結婚後（水彩）	
320	162	8	テーブルの桃	紙、鉛筆、水彩				
321	162	9	テーブルの柿	紙、鉛筆、水彩			結婚後（水彩）	
322	162	10	骨	紙、鉛筆、水彩			結婚後（水彩）	
323	162	11	石膏	紙、鉛筆、水彩		あり	結婚後（水彩）	
324	162	12	卵	紙、鉛筆、水彩			卵デッサン（宮原画廊発表の頃）	
325	162	13	抽象	紙、マーブリング			弟・春雄氏の死から結婚まで	
326	162	14	抽象	紙、マーブリング			弟・春雄氏の死から結婚まで	
327	162	15	貝	紙、水彩		あり	結婚後（水彩）	
328	162	16	カメラ	紙、水彩		あり	結婚後2	
329	162	17	魚、鳥	紙、着彩			ボルトシリーズの前	
330	162	18	顔	紙、鉛筆、水彩			版（清水聖策氏より学ぶ）	
331	162	19	抽象	紙、鉛筆、水彩			春雄さんの死から結婚まで	※裏面は20（記録番号）
332	162	20	少女	紙、鉛筆、水彩			光風会所属時	
333	162	21	抽象	紙、鉛筆、水彩			弟・春雄氏の死から結婚まで	※裏面は22（記録番号）
334	162	22	抽象	紙、鉛筆、水彩			弟・春雄氏の死から結婚まで	
335	162	23	抽象	紙、鉛筆、水彩			弟・春雄氏の死から結婚まで	
336	162	24	鳥、花	紙、鉛筆、水彩				
337	162	25	抽象	紙、ボルト、墨			結婚後	
338	162	26	抽象	紙、マーブリング			弟・春雄氏の死から結婚まで	
339	162	27	抽象	紙、鉛筆、水彩			弟・春雄氏の死から結婚まで	※裏面は28（記録番号）
340	162	28	抽象	紙、鉛筆、水彩			弟・春雄氏の死から結婚まで	
341	162	29	猿	紙、墨			結婚後・水墨画	
342	163		時の堆積（蟹の爪）	紙、墨、ペン			時の堆積	
343	163	2	時の堆積（ギブス）	紙、墨、水彩、鉛筆			時の堆積	
344	163	3	時の堆積（ギブス）	紙、墨、水彩、鉛筆			時の堆積	
345	163	4	時の堆積（骨）	紙、墨、水彩、鉛筆			時の堆積	
346	163	5	時の堆積（骨、角）	紙、墨、水彩、鉛筆			時の堆積	
347	163	6	時の堆積（巣）	紙、墨、水彩、鉛筆			時の堆積	
348	163	7	時の堆積（巣）	紙、墨、水彩、鉛筆			時の堆積	
349	163	8	時の堆積（イソギンチャクの貝）	紙、墨、水彩、鉛筆			時の堆積	
350	163	9	時の堆積（卵）	紙、墨、水彩、鉛筆			時の堆積	
351	163	10	時の堆積（卵）	紙、墨、水彩、鉛筆			時の堆積	
352	163	11	時の堆積（巣）	紙、墨、水彩、鉛筆			時の堆積	
353	163	12	時の堆積（ギブス）	紙、墨、水彩、鉛筆			時の堆積	
354	163	13	時の堆積（卵）	紙、墨、水彩、鉛筆			時の堆積	
355	163	14	時の堆積（卵）	紙、墨、水彩、鉛筆			時の堆積	
356	163	15	抽象	紙、墨、ペン			時の堆積	
357	164		海老、角、キューブ	紙、鉛筆、水彩			ボルトシリーズの直前	
358	164	2	パイプ、手、骨	紙、鉛筆、水彩			ボルトシリーズの前段階	

359	164	3	果実	紙、鉛筆、水彩			ボルトシリーズの前段階	
360	164	4	手、パイプ	紙、鉛筆、水彩			ボルトシリーズの前段階	
361	164	5	はんごう	紙、鉛筆、水彩			ボルトシリーズの前段階	
362	164	6	靴	紙、鉛筆、水彩			ボルトシリーズの前段階	
363	164	7	抽象	紙、墨			ボルトを使用するに至るまで	
364	164	8	鳥	紙、鉛筆、水彩		あり	結婚後	1992.12月9日
365	164	9	卵	紙、水彩			ボルトシリーズ前	
366	164	10	自画像	紙、鉛筆、水彩		あり	結婚後	
367	164	11	洋梨	紙、鉛筆、水彩、コラージュ			ボルトシリーズの直前	
368	164	12	パイプ、海老	紙、墨、水彩、鉛筆、色鉛筆			ボルトシリーズの前段階	
369	164	13	パイプ、手	紙、鉛筆、水彩			ボルトシリーズの前段階	
370	164	14	魚、手	紙、鉛筆、水彩			ボルトシリーズの前段階	
371	164	15	人形	紙、鉛筆、水彩、色鉛筆			ボルトシリーズの前段階	
372	164	16	靴、魚	紙、鉛筆、水彩			ボルトシリーズの直前	
373	164	17	蟹の爪	紙、鉛筆、水彩			ボルトシリーズの直前	
374	164	18	魚	紙、鉛筆、水彩			ボルトシリーズの直前	
375	164	20	骨	紙、水彩			ボルトシリーズ前	
376	165		キューブ	石膏、写真			宮原画廊で発表（インスタレーション移行期）	
377	165	2	卵	石膏、写真			宮原画廊で発表（インスタレーション移行期）	
378	165	3	キューブ	石膏、写真			宮原画廊で発表（インスタレーション移行期）	
379	165	4	卵	石膏、写真			宮原画廊で発表（インスタレーション移行期）	
380	165	5	卵	石膏、写真			宮原画廊で発表（インスタレーション移行期）	
381	165	6	卵	石膏、写真、ペン			宮原画廊で発表（インスタレーション移行期）	
382	165	7	卵	石膏、写真、ペン			宮原画廊で発表（インスタレーション移行期）	
383	165	8	キューブ	石膏、写真			宮原画廊で発表（インスタレーション移行期）	
384	165	9	卵	石膏、写真			宮原画廊で発表（インスタレーション移行期）	
385	165	10	卵	石膏、写真			宮原画廊で発表（インスタレーション移行期）	
386	165	11	キューブ	石膏、写真			宮原画廊で発表（インスタレーション移行期）	
387	165	12	キューブ	石膏、写真			宮原画廊で発表（インスタレーション移行期）	
388	165	13	卵	石膏、写真			宮原画廊で発表（インスタレーション移行期）	
389	165	14	キューブ	石膏、写真			宮原画廊で発表（インスタレーション移行期）	
390	165	15	卵	石膏、写真			宮原画廊で発表（インスタレーション移行期）	
391	166		卵	紙、鉛筆、ペン、水彩		あり	宮原画廊で発表（インスタレーション移行期）	
392	166	2	ひまわりの種	紙、ペン、水彩			結婚後	
393	166	3	枯葉	紙、ペン			結婚後	
394	166	4	魚、顔	紙、水彩、ペン			日岡作品でない可能性あり	
395	166	5	魚	紙、ペン			結婚後	
396	166	6	魚	紙、ペン			結婚後	
397	166	7	卵	紙、水彩、ペン			結婚後	
398	166	8	卵の殻	紙、水彩、ペン、色鉛筆			結婚後	

399	166	9	鳥	紙、ペン			弟・春雄氏の死から結婚まで	
400	166	10	空き缶	紙、ペン			結婚後	
401	166	11	貝	紙、ペン			結婚前（ぐるーぷ連のチラシデザイン）	
402	166	12	たまごの花	紙、ペン			結婚後	
403	166	13	魚	紙、ペン、水彩			結婚後	
404	166	14	巣	紙、ペン、水彩			結婚後	
405	166	15	巣	紙、ペン、墨			結婚後	
406	166	16	鳥	紙、ペン			結婚後	
407	166	17	抽象	紙、ペン、水彩			光風会所属時	
408	166	18	ほおずき	紙、ペン、水彩		あり	結婚後	
409	166	19	果実、花	紙、ペン			結婚後	
410	166	20	蟹	紙、ペン		あり	結婚後	
411	166	21	抽象	紙、ペン、コラージュ			弟・春雄氏の死から結婚まで	
412	166	22	鳥	紙、鉛筆、ペン		あり	結婚後	
413	166	23	風景	紙、ペン		あり	弟・春雄氏の死から結婚まで	
414	166	24	靴	紙、ペン			詩集（落合真澄氏）の装丁のアイデア	
415	166	25	抽象	紙、ペン、着彩		あり	弟・春雄氏の死から結婚まで	1980. 7/3
416	166	26	鳥（下絵）	紙、ペン			結婚後	
417	166	27	抽象	紙、ペン、色鉛筆		あり	光風会所属時	S58.8.14
418	166	28	植物	紙、ペン、水彩			結婚後	
419	166	29	指（コピー）	紙、ペン			結婚後	30のコピー
420	166	30	指	紙、ペン			結婚後	
421	166	31	植物	紙、ペン、着彩			結婚後	
422	166	32	植物	紙、ペン、着彩		あり	弟・春雄氏の死から結婚まで	
423	166	33	植物	紙、ペン		あり	結婚後	
424	166	34	花	紙、ペン			結婚後	33の裏面
425	166	35	落合真澄氏のための挿絵	紙、ペン				
426	166	36	落合真澄氏のための挿絵（コピー）	紙、ペン			詩集（落合真澄氏）の装丁のアイデア	35のコピー
427	166	37	頭蓋骨	紙、ペン			結婚後	
428	166	38	植物	紙、ペン			結婚後	
429	166	39	植物	紙、ペン、水彩			結婚後	
430	166	40	抽象	出力用紙、水彩			弟・春雄氏の死から結婚まで	
431	166	41	魚	紙、ペン			結婚後	
432	166	42	鳥	紙、ペン、水彩			光風会所属時	
433	166	43	**自画像35歳**	紙、鉛筆、水彩、墨、ペン		あり	光風会所属時	
434	166	44	魚	紙、鉛筆、水彩			結婚後	
435	166	45	虫	紙、鉛筆、水彩			弟・春雄氏の死から結婚まで	
436	166	46	蝶	紙、水彩			ボルトシリーズ前	
437	166	47	頭蓋骨	紙、ペン、水彩			結婚後	
438	166	48	魚	紙、水彩、ペン			ボルトシリーズ前	

439	166	49	抽象	紙、ペン		ボルトを使用するに至るまで
440	166	50	虫	紙、ペン		弟・春雄氏の死から結婚まで
441	166	51	虫	紙、ペン		弟・春雄氏の死から結婚まで
442	166	52	鳥	紙、水彩、ペン、墨		光風会所属時
443	166	53	巣	紙、鉛筆、水彩		結婚後
444	166	54	鳥	紙、水彩		ボルトシリーズ前
445	166	55	鳥	紙、水彩		
446	166	57	虫	紙、水彩		結婚後
447	166	58	虫	紙、水彩、鉛筆		結婚後
448	166	59	鳥	紙、ペン	あり	結婚後
449	166	60	靴下	紙、ペン		結婚後
450	166	61	海老	紙、ペン		結婚後
451	166	62	抽象	紙、ペン		結婚後
452	166	63	果実	紙、ペン	あり	結婚後
453	166	64	花瓶	紙、ペン		結婚後
454	166	65	抽象	紙、水彩		結婚後
455	167	2	骨	紙、鉛筆、水彩		ボルトシリーズ前
456	168		人物	紙、鉛筆、水彩	あり	ボルトシリーズの前
457	169	2	骨	紙、鉛筆、水彩	あり	ボルトシリーズの前
458	170		抽象	紙、鉛筆	あり	ボルトシリーズの前
459	171		抽象	紙、鉛筆、水彩	あり	死の直前
					あり	死の直前
						森本氏所蔵
						森本氏所蔵

以下は、推測される時期について環境面において分類分けしたものです。

時期	年代	年代詳細	時期名
晩期	2001～2003	2001年	空港展にて発表
		2001年頃	フラクタスに入ったころ
		2001年頃	トークイベントで使用(がんになる前)
		2003年頃	(死の直前)

時期	時期名
不明	家を建て、室内に飾るための作品を制作時のもの
不明	小林順一氏のところで個展をしたころ
不明	版(清水聖策氏より学ぶ)
不明	版(清水聖策氏より学んだあと)
不明	詩集(落合真澄氏)の装丁のアイデア
不明	本の装丁のため

×	日岡作品でない可能性あり

切期	1972～1985	1979～1986	春雄さんの死から結婚まで	
中期	1986～1994	1986以降	結婚後	
		1986以降	結婚後アクリル画移行期まで	
		1986～	結婚後2	
		1986以降	結婚後・水墨画	
		1986以降	結婚後(水彩)	
		1988年頃	宮原画廊で発表(インスタレーション移行期)	
		1988年頃	卵デッサン(宮原画廊発表の頃)	
後期	1995～2000	1996年頃	時の堆積	
		1997年頃	箱の底シリーズ	
		～1995	ボルトシリーズの前段階	
		～1995	ボルトシリーズの直前	
		～1995	ボルトを使用するに至るまで	
		～1995	ボルトシリーズの前	

※「箱の底シリーズ」…「空間から時間へ」の通称、「ボルトシリーズ」…「時の堆積」の通称

日岡兼三　年譜

年齢	西暦	和暦	月日	できごと、展覧会名
0歳	1946年	昭和21年	2月	父　日岡金助　母　五月雨子(つゆこ)の三男として誕生
			9月	日本の敗戦後、帰国
6歳	1952年	昭和27年		日和佐町立日和佐小学校に入学
8歳	1954年	昭和29年		父の両親の要望により宮崎に戻る
12歳	1958年	昭和33年		宮崎市立大宮中学校入学
15歳	1961年	昭和36年		宮崎県立宮崎農業高等学校に入学
18歳	1964年	昭和39年		宮崎県立宮崎農業高等学校　卒業
19歳	1965年	昭和40年		父の家業を手伝う(1977年まで)
26歳	1972年	昭和47年		青木画廊主催の絵画教室(講師:二宮勝憲)に通う
28歳	1974年	昭和49年		末原晴人に師事する(1979年まで)
32歳	1978年	昭和53年		光風会に出品(1982年まで)
				3人展(柏田省吾・西形信行と)
33歳	1979年	昭和54年		弟　春雄　病没
34歳	1980年	昭和55年	5月1日～5月17日	個展
			8月5日～8月10日	2人展(柏田省吾と)
				コラージュを始める
35歳	1981年	昭和56年		宮崎県総合美術展、宮崎日日新聞美術展出品
				1年ほど、清絵画研究所(主宰:清忠寿)の講師助手を務める
36歳	1982年	昭和57年		父　日岡金助　没
				日岡絵画教室を主宰
				公民館の美術講師を務める
				本格的な創作活動を始める
38歳	1984年	昭和59年		2人展(柏田省吾と)
39歳	1985年	昭和60年	8月13日～8月18日	2人展(柏田省吾と)
40歳	1986年	昭和61年		新納(にいろ)美穂と結婚
			12月22日～1987年1月31日	個展
42歳	1988年	昭和63年		陶土によるオブジェを発表
			8月14日～8月20日	個展
			11月2日～11月8日	ぐるーぷ連15周年記念企画展
43歳	1989年	平成元年	12月18日～1990年1月30日	個展
47歳	1993年	平成5年	1月1日～1月8日	個展
48歳	1994年	平成6年	12月25日～12月30日	2人展(久保洋子と)
50歳	1996年	平成8年	2月8日～2月12日	個展
51歳	1997年	平成9年	2月4日～2月9日	個展
52歳	1998年	平成10年	2月4日～3月2日	企画展
			3月3日～3月8日	2人展(湯地潤子と)
53歳	1999年	平成11年	2月22日～3月12日	個展
54歳	2000年	平成12年	6月20日～7月9日	英展出品
55歳	2001年	平成13年	1月1日～1月31日	空港企画展
			7月	肺がんにかかるが延命治療を望まず制作活動を続ける
			11月23日	アーティストトーク
			11月3日～11月30日	第1回フラクタス展
56歳	2002年	平成14年	2月2日～2月27日	企画2人展(日岡美穂と)
			9月2日～9月29日	第2回フラクタス展
			9月3日～9月8日	第2回フラクタス展
			9月3日～9月16日	第2回フラクタス展
			9月19日～9月23日	愛と祈りの平和展
57歳	2003年	平成15年	7月22日～7月29日	個展
			8月19日	永眠
			9月26日～10月26日	絶筆展
	2005年	平成17年	8月9日～8月21日	遺言による個展
	2006年	平成18年		故　日岡兼三展　蟲を描く
	2007年	平成19年	11月19日～12月8日	故　日岡兼三展「蟲」

※鵬翔高校と農業高校の臨時講師を勤めた時期については、現在調査中です。

場所	ジャンル	テーマ
満州国吉林省新京市		
徳島県日和佐町		
宮崎市　ひまわり画廊	絵画	
宮崎市	版画	
宮崎市　ひまわり画廊	絵画	
宮崎市		
宮崎市　ひまわり画廊	絵画	「埋める」
宮崎市　ギャラリー喫茶「ノラ」		
宮崎市　宮原画廊	絵画、写真、オブジェ	
宮崎市	オブジェ	「今日も明日も」
宮崎市　ギャラリー喫茶「ノラ」	絵画、オブジェ	「絵と焼き物展」
宮崎市　ギャラリーウェーブ	絵画、オブジェ	
宮崎市　宮日会館2Fギャラリー	絵画、オブジェ	
宮崎市　宮日会館2Fギャラリー	絵画	「時の凝固」「堆積するとき」
宮崎市　宮日会館2Fギャラリー	インスタレーション	「空間から時間へ」
鹿児島県隼人町　南風人館	インスタレーション	「空間から時間へ」
宮崎市　宮日会館2Fギャラリー	インスタレーション	「空間から時間へ」
宮崎市　宮日会館2Fギャラリー	インスタレーション	「空間から時間へ」
福岡県　田川市	絵画	「卵」
宮崎空港	絵画、立体	「卵」「種」
宮崎市　ノイエ・アート・スペース	インスタレーション	
綾町　グローバルビレッジ	インスタレーション	「時」
鹿児島県霧島市　南風人館	インスタレーション	「時」
宮崎市　ギャラリーウィンドファーム※第1会場	インスタレーション	「時」
宮崎市　宮崎県立美術館※第2会場	インスタレーション	「時」
宮崎市　アーバンホテル※第3会場	絵画	「時」
宮崎市　宮崎県立美術館	インスタレーション	
宮崎市　宮日会館2Fギャラリー	インスタレーション	「時」
宮崎市　ギャラリーウィンドファーム		
宮崎市　宮崎県立美術館	インスタレーション	「時」
鹿児島県霧島市　南風人館		
宮崎市　ギャラリーウィンドファーム	絵画	「蟲」

協力へのお礼

今回の展覧会を機会に、有志にお声かけさせていただき、
日岡兼三作品の保護のためのドネーションを受け付けました。
ご協力いただきました下記の皆さまに心よりお礼申し上げます。

伊福満代
薄葉了未
小田原義征　小田原英子
鎌田雄資
加茂博子
久保糸子
久保寛子
久保洋子
近藤陽菜
See Designing
shizukart®
島嵜清史
杉尾晶子
中原誠也
中村美里
原井静香
堀本千恵
牧之瀬麻井
牧野紀子
松田はるか
宮城壮一郎
森美裕紀
山下昇平
屋良武
弓削智子
湯地潤子
吉冨昭仁　吉冨洋子

（敬称略、五十音順）

※掲載を辞退された方を除く

日岡兼三

KENZO HIOKA

発 行 日　平成２７年１０月

発 行 者　日岡兼三生徒の会（代表　後藤　慎太郎）

編集協力　青井　美保

監　　修　日岡　美穂